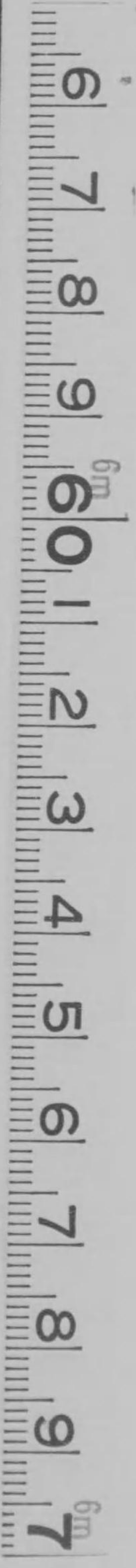


396

234



始



27.12 18

375 =

34

396

234

Handwritten Japanese calligraphy in cursive style (sōsho), consisting of several vertical characters.



396-234

毒舌

浪六著

毒舌の毒は残忍なる青殺の毒にあらず、悪戦苦闘の悪は罪惡の惡にあらざると
等しく、微温的の反對語にして、づうくしく面の皮の厚き今日の人間に對せむ
とすれば、なまぬるき情愛の普通藥を以て到底その慢性病に何等の效なきがた
め、勢ひ餘儀なく強烈の刺戟劑を用ひざるべからず、いはゆる菩薩心夜叉手の
意味より來る、

經節は搔かれて次第に細くなり筋は剥かれて裸になれど、人間の圖太くなれる
奴は、恥を恥とせざるため恥を搔く事なく面の皮また、剥かれて段々と厚なる
かはりもの

がため、よほど無遠慮に手荒く扱はざれば、石地藏の頭を蚊の螫すほどにも感ぜず、苦言を呈するぐらゐるでは逆も應のない相手として、お世辭萬能の今日こゝに殊更ら毒舌の文字を獻す。

◎武と俠

武俠の二字、動もすれば今日の世間に誤らる、就中、自己の胃に消化力なくして加之歐米の美味を取る能はず只その餘り物を拾ひ食する徒輩は、これを文明に用なき過去の遺物とすれど、彼等は却て新しき時代の推移と共に變化應用の活機を知らざる木像人にして、牛の肉は黒きものと思へるが如し
武は昔の山賊退波に於ける武者修業の武にあらず、俠は講釋師の張扇に叩き出

内務大臣が親分連中を招いて懇談せりと

北々の唱導せんとする武は、世界平和の保證に

々の鼓吹せむとする俠は人道擁護、愛より來れり、

これを個人とすれば、何物にも屈せず時代の要求に應ずべき精力の發揮、即ち今日の武にして、いかなる場合も撓まず社會の進歩に伴ふべき愛の協力、即ち今日の俠にして、國家の内外交これを失へば原動力なく進行力なく石炭を燃かざる汽車の如く、人間の居家處世これを失へば氣のぬけたるビールの如く泡を吹く力もなし、

現代の社會觀を履違へて今日の思想上に營養不良なるハイカラ者流は、月賦にせよ着遣けにせよ流行の洋服を以て紳士の體面と心得たるが如く、内容空虚に

かはりもの

して只その皮相に聲音の反響器を備へたる結果、同一の意味も武器といへば古きものと考へ武器といへば新しきものと感じて、社會も人間も時代適應の活物たるを知らざる哀れさよ、かゝる徒輩が毛織物の高くなるに従ひ、目を白黒にして狼狽へ騒ぐ奴なり、

武は人事一切に於る精力絶倫の根底にして、大なるインスピレーションを含み、俠は不自然なる社會の壓迫を打破すべき博愛一致の代名詞にして、最も廣きテモクラシーを含むや、豈それ浪花節の看板に掲ぐるゝが如き心細い武士道の武ならむや豈それ活動寫眞の廣告に川ひらるゝが如きお粗末な火祭りだまふつゝや。

◎雑誌の題號

近來の流行、いづれの雑誌を見るも、その雑誌固有の名

號と題して新を競ひ奇を争ひ、あまりに苦心慘澹の結果、中には却て愚劣を極め滑稽に類するもの多し、或雑誌の主幹それがために窮して我を訪ひ來り、時に先生、何か突飛で素敵に面白い題號は御座いませんかといふ、我これに答へて、あるよ、あるよ、大にあるよ、思ひ切つて『少女誘拐號』とすれば忽ち賣切れの盛況、きつと十萬や二十萬の増刊は間違ひなしと笑へば、顔の色を變て驚き、とんでもない、内務省と警視廳が許可しませんと、我さらに教へて曰くあゝ智恵のない奴かな、何ぞ策なきの甚だしきや、政府の許さざるは風教上の罪惡を増長するかためにして、加之少女の誘拐を今日の事實とすれば、敵を防ぐに敵を知らざるべからず、その題號の下へ小さく割書して『父兄の防禦警戒、本人の御用心』と加へよ、もし少女誘拐號を出すの膽魂なくば同じ意味より、

かはりもの

かはりもの

『欺偽横領號』とすべし、これも賣れるに極つてると笑へば、冗談は措て先生眞面目に教へて下さいといふ、そこで我は眞面目に教へて曰く「六〇六號」これに限るといへば、主幹先生、呆れて怒つて罷り去る、

罷り去るの語は馬鹿にさると殆ど相通ず、なるほど呆れて怒りしは尤も千萬の次第なり、聊か氣の毒に考へ、すぐに後より一書を郵送して、

- 男女うぬほれ號、○一文なしの世渡り號、○慈善の押賣號、○ゆすり文句の研究號、○人の種で相撲を取る四十八手號、○うまく借金を踏倒す縦横の奇策號、○相手に沸湯を吞ます種々の痛快號、○食はずに生きて行く妙案號、○馬鹿でも豪く見える工夫號、○必ず成金となれる秘訣號。

は請合ひ申し候

◎生活難と生存難

新聞に雑誌に、いたるところ世間の實際にも喧ましく、頻りに生活難といふ聲を聞けど、そもく今日の社會に生活難を叫ぶの資格を有するもの果して幾何ありや、

生活とは人間その時代の産物として時代に適應せる生の以外、さらに何等か社會的に活動すべき貢獻の意味にして、たゞ眼前の衣食住に窮せるものは生活難にあらず、生存難なり、生存の窮迫、單に生て行くといふ事の難きもの、即ち生きざるべからず食はざるべからずといふ點より生甲斐もなく満足に食へぬものを生存難といふ、生存難の身を以てなま意氣に生活難を叫ぶが如きは、寧ろ

かはりもの

かはりもの

潜上の沙汰といふべし、

不自然の物價騰貴の爲政者の罪にして、社會一般これを責むるに充分の理由ありと雖も、その爲政者に何等の抱負なく何等の手腕なく殆ど無爲無能の相手とすれば、丸裸の債務者に證文を突付けて喧嘩するが如く、喧嘩に勝つても喧嘩の勝は現在に於ける衣食住の支拂ひにあらずして、どしどし遠慮なく押寄せ來る物價騰貴は自己の力を以て當らざる可らず、

結局は今日の人間、あまりに政府を信頼し過ぎ、あまりに爲政者を褒きものと考へ過ぎ、あまりに頻々たる學者論客の切賣文句を味方と心得過ぎ、あまりに慈善事業と稱し救濟事業と稱する如きものを眞面目に受け過ぎ、その他あらゆる總ての社會政策に安心し過ぎてうかくと人頼みに不用心の結果、いよく

自己の頭に火の付た時は手に一滴の水もなく、たゞ徒に悲鳴をあげて見苦しく狼狽へ騒ぐのみ

いかなる時代にも、いかなる場合にも、いかなる政府の下にも、いかなる迫害を蒙る時に於ても、人類原始的の太古は知らず今日の社會組織をなせる以上、人間の食ふに困るといふ事は人間の恥辱にして、人は分相應の衣食住を誇り得ざると共に、當然その生ける外に何等かの價値を有するがため、鳥獸さへ餓死せざる動物界に始めて人間たるを得べし、

然るに今日の人間、中には食ふに困らぬを以て自慢する奴あり、また恥かしけもなく寧ろ平氣に自己の生存難を曝け出しながら、これを生活難と履違へて狂氣の如くに叫び廻る奴あり、物價ますく騰貴して人間ますく下落し來る、

かはりもの

かはりもの

なさけない次第にあらずや。

大なる富は得られずとも相應の衣食住を以て満足せむとすれば、物質以外に超然たり得べき人間として、絶えず物質のために追廻され絶えず物質のために蹂躪され侮辱され、甚だしきは物質のために組伏せられて咽笛を押へられ、ぎゆうの音も出ない奴の影がさるる今日、これを社會の罪とする前に於て、まづ自己の罪に歸せざるべからず。

◎書畫骨董

近來の流行中、最も世間の耳目を驚がせるものは、いたるところ生存難を叫べる今日、書畫骨董の突飛なる價にして、いはゆる名家の藏品と稱し富豪の入札と稱し、一幅の畫にも一個の茶器にも巨萬をもつて争ひ、十萬圓の小道具さら

かはりもの

に珍らしからず、二十萬圓の屏風一雙を惜まれて親引となるに至る、これを普通人の境遇より比較すれば、その馬鹿けたる無用の競争に呆れ、これを食ひ兼たる貧乏人の目より見れば、かくまで極端なる貧富の懸隔を眼前に示さるゝ結果もはや羨望嫉妬の念を通り越して動もすれば彼等の傍若無人を呪もの多し。たま〜或華族の賣揚高百萬圓を超過せし時、呪ひ黨の一人、その日の新聞を驚擱みのまゝ飛込來りて頻りに憤慨せる面を見ながら我は笑ふて曰く、全體この頃の君等は物の見やうを間違つてさういふ吝臭い小さな膽ツ魂だから無効だ、いはゆる富豪と稱する彼等が何十萬圓で何を買はうが何を求めようが、欺偽横領にあらざるかぎり他人の指圖を受けない彼等の金で彼等の勝手だ、加之も社會に對する遠慮だの人心に對する反抗だのといふ事は、横暴に馴れた富豪

かはりもの

の心理状態を知らざる君等の誤解で、寧ろ彼等は社會に對する一種の權威とし名譽と心得てくるらるだ、實際また逆も今日に得られない美術品は、國の寶として暫く彼等に保管された方が宜い、彼等は金の勢ひで天晴れ自分の所有にしたと誇つてゐるが、間斷なき人生の變遷と動搖し易き經濟界の激しさは永久その誇りを彼等の子孫に繼續せしむるや否やは頗る覺束ない、うかくすれば買つた本人また直ぐに賣るかも知れない、結局彼等は、金を出して國寶の番人になる事を競争したと見れば宜い、金の外に藝のない奴は最も金の多く出たものを最も大切にするから我輩の如きは諸家の入札ある毎に今後ますます猛烈なる競争をさして更に十倍二十倍目の飛出るやうな高價に引取らせる事を希望する、しかし君等の食つたり着たりするものは今後ますます安くなる事を希望すると笑へば、流星の呪ひ黨も聊か拍子ぬけて、こそくと歸れり、

◎成功談

社會の大勢は時々刻々に變化して、殆ど間斷なき廻り舞臺に乗せられたるが如き今日の青年は、うっかり老人の成功談に乗るべからず、由來この成功談なるもの、多くは其人の過去に於ける自慢話にして、暇のある時これを面白半分聞きながら其中の幾分を所謂他山の石とするには足れども悉く、馬鹿正直に受けて、時代の相違も周圍の事情も考へず只そのまゝの丸呑み實際の用に供せむとすれば、とんでもない大間違ひを仕出來すの恐れあり、つまり成功は他人より見たる比較的の成功にして、もし本人これで成功せりといへば既に人間の行止りを告白せるもの秒の動かざる時計と等しく、到底それ

かはりもの

かはりもの

以上に進まざる中止状態電車の立往生にも増して見込のない廢物
 まして、近來成功談には猶更ら油斷すべからず、現在に證據人なきため自己の
 威張る方法この外になきたため、中には眞面目なる青年を喝かして途方もない嘘
 を吐く狸老爺あり、

青年は寧ろ老人の成功談よりも失敗談に耳を傾けて、その失敗せる所以を仔細
 に玩味し研究し、これを我のための案内者とし先導者とすればたとひ時代に多少
 の相違ありとも、まづ地圖を披いて方角を知るが如く、狼狽て川に陥り池に飛
 込むが如き事なし、

決して老人を馬鹿にせよといふにあらず、老人は世の中の長者にして、固より
 敬意を拂べきものなれど、たゞ近來の老人中に怪しき成功談を賣物とする法螺

吹の多きと共に、近來の青年また自己の力量に進むべき道を忘れて動もすれば
 棚牡丹餅を得むとするもの多きがため、結局この成功談の繁昌は社會に何等の
 利益なく、寧ろ青年の前途に害ありといふべし、

老人は宜しく過去の自慢話を止めて幾多の我實驗上より失敗談を青年に與ふべ
 く、青年は宜しく老人の成功談を面白がらずして幾多の訓戒を含める失敗談を
 冀ふべし。

◎青年の勉強

勉強は青年訓の第一なれど、いかなる場合に斯の如く勉強せよと教へず、いか
 なる學問に斯の如く勉強せよと示さず、たゞ漠然たる壓制の命令的に勉強せよ
 と迫るが如き動もすれば青年訓にあらずして青年殺となること多し。

かはりもの

かはりもの

將校無謀の戦線に向けられたる兵士の忠勇は大死に終ると等しく、その性質と體格を考へずして刃に勉強を行ふは瘦馬に重荷を脊負はせて坂の下より鞭つが如し、

近來の父兄中この瘦馬に鞭鞭を加へて最愛の子弟を半病人とするもの多く、本人また自己の瘦馬たるを知らずして殊更に重荷の坂を上らむとするがため半途に斃るゝもの多く、勉強の文字その用を誤れば人生一種の恐べき兇器となり。加之も一思ひの安樂に殺さず、お爲ごかしの長き歳月を重ねて殆ど弄り殺しの残酷を行ふが如し

努力も奮闘も勉強も元來の自發的たると共に第一まづ體格を選ばざるべからず學生中の俊才にして往々社會の落伍者たるもの少からざるは、憫むべし十中八九、皆この堪難き勉強責に大事の腦味噌を磨滅され五體の皮肉を削り取られたるがためなり

されど以上は忘却ものを許せるにあらず、たとひ學校の優等生たらざるも社會に出で、健全の有用物たらむ事を今日の青年に求めしのみ、ぶツても叩いても達者の身體を持ちながら勉強せざる奴は、いはゆる浮浪性を帯びたる一種の低脳にして、もし無事に大道の土方となれば本人の幸なり、

また頭腦と身體の兩全を得て、さのみ勉強もせざるに絶えず成績の優秀なるものあり、世間これを一口に天才と稱すれど、實は頭腦の働きよりも寧ろ身體の強壯に基する點の多きを見れば、ますく、以て虛弱體に過度の勉強は何の効なく瘦馬に重荷の恐るべきを知るべし、

かはりもの

結局、身體の弱きものは強て深き學問の殺害に逢ふべからず、學者は國家のため、に尊重すべきものなれど、人間は必ずしも問すべき約束の下に生れたるにあらずして、自己の健康これを許さざれば、たゞ中學程度の普通教育を受けて足れりとすべし、いたるところ人生さらに活きたる實地の社會學校あり、一枚の卒業證書を得むがために大切の生命を失ふて堪るべきや、不幸にして目的の學科を遂げられざる身體虛弱の青年に對し、殊更に此一節を加ふ

もし養生かたぐい意義ある生涯を送らむとすれば、幸ひ我國の青年に自然の大病院たるべき南洋諸島あり、内也の學校を去り都門の書籍を捨て、四時の綠陰に憩ひ紺碧の海風に吹かれながら暢氣に面白く天與の産物を獲得するは、穴熊の如く居縮みて、徒に無用の煩悶するよりも、いかに痛快の極ならずや。

◎めつこ飯の堀尾金八郎先生

現今、地方で寄宿舎の設けある學校では、その賄方は受負制度でなくて、自炊といふ名義の下に、生徒自身が監督の下に使用人をして働かせ、その食事を造らしめるものが多いところが、以前は、東京でも地方でも大抵は受負制度で特に賄方といふものがあつた、そして學校生徒に不平があるときは、それが賄方に對して不平ならまだしも、他に依る不平であつても、その鬱憤は賄に對して發せられたものである、賄こそ迷惑な話であつた、それで賄方は學生不平の安全弁といふ様なものであつた、この弊を矯正する爲に、彼の自炊制度といふものが生れたのである、それも始めの中は一二の學校が試みにやつたもので、その結果が善良といふから一般に行はれたものである。

今の岡山縣津山高専女學校校長たる堀尾金八郎先生も、その高等師範學校在學中に、その賄委員といふに擧げられたことがあつた、或時、堀尾先生は近頃賄はよくメツコメシを喰はして困る。改めたいと申し出たところがその委員等の誰一人このメツコメシといふものを解するもので無い、漸う聞き質して、そのメツコメシといふものは、飯の炊き損で彼のしんのある飯といふことが分つた、それから後には同窓の人達は、この堀尾先生を綽名して、メツコメシといふたものである、今や飯の炊方に縁ある女學校の校長としてメツコメシにならぬ様生徒に訓諭してゐるか何うか、

◎犠牲の廉賣

近來は物價騰貴のため處々に公設市場なるものを開き、いたるところ盛に廉賣

の看板を掲げたれど、讀んで字の如く只これ價を廉く賣るといふのみにて、いはゆる安からう悪からうの諺に違はず、その事實の案外に下等なるだけ寧ろ世間普通の相場よりは却つて高きものを供せらる。

結局、頭腦なくして耳と目ばかり騒ぐ人間この公設の二字を有難がり廉賣の看板に引寄せられ、然も慾が深くて吝臭い眼前に制せらるゝ馬鹿正直の多きを知るべし。

殊更に贅澤を誇りて高きものを買はむとするは愚の極なれど、わざ／＼暇を潰して人混に揉れながら安くて悪い品物を争ふが如きは、いづれの點より見るも時代と共に向上すべき人間の努力にあらず、第一また實際に社會政策の公設市場を意味して餘儀なき貧民のために救濟的の廉賣を行はむとすれば、その局に

かはりもの

あたるものその事に従ふもの、宜しく原産地より商人の手を経ずして直接さらに大なる特殊の設備と大なる根底の組織を要すべし、わづかの空地を見付けて五六軒の店を並べ、ガードの下に兩宿りに等しき小屋掛けの廉賣なるもの、世界的の物價問題より押寄せられて、二千三百萬坪以上の土地を有し、二百萬以上の人口を有せる今日この大都會に何等の效果ありや、失禮ながら臍茶の至りと笑はざるべからず。

この廉賣市場に殆ど相似たるものは、頻りに叫ばるゝ近來の犠牲なり、僕は君のために犠牲を拂つてる。我輩は社會のために犠牲を拂つてる、國家のために拂つた、人類のために拂つた。宗教のために拂つた、教育のために拂つた、いや事業のために拂つた、あの目的に拂つた、戀のために拂つた愛のために拂つ

た、いたるところ何人も拂つた拂つたといふ犠牲の大安賣。

家賃は拂はず借金は拂はず米屋を倒し味噌醬油を倒しても、この犠牲のみは滯りなく間違ひなく、どしどしと景氣よく拂ひし結果、あまり拂ひ過ぎて廉賣の程度を通り過ぎ、もはや今日の犠牲は無價となれり。

願はくば犠牲なるものゝ價値、他の物價と反對に及ぶかぎり暴騰して、ますますすばからむ事を望む、

自己の力に餘れるところを人に施し人を救ふが如き乃至また多少の損害を忍びて社會のために貢献するは人類共同の約束にして、寧ろ當然の義務といふべく、既に犠牲と稱する以上、殆ど我を空しうして他の利益に供せざるべからず、従ふて人間の生涯に幾度もあるべからず、この高潔なる偉大の道義心より生ずべ

かはりもの

かはりもの

き犠牲を數多の挨拶と等しく口から出まかせに饒舌り歩いて、竟に今日の如く無價値のものとするは、あまり犠牲を粗末に取扱ひし大安賣の結果、いはゆる公設市場の廉賣よりも更に品質の劣れるがためなり、甚だしきは他人の預かり物でもない我妻子眷族を養ふに天晴れ手柄顔の犠牲を拂ひつゝありと思へる奴あり、最も滑稽なるは自己の衣類を質に置いて酒を喰ひながら、これさへ犠牲を拂つたといふ奴あるに至る、お手輕に犠牲の語を發すること麥藁細工の笛を吹くが如し。

◎同情の流行

犠壇と親類の流行語に同情なるものありて、この同情また到るところの今日、めちやめちやの大安賣を始めたり、曾て我著書『人間學』の一節に同情論あれ

かはりもの

ば、これを聊か取捨して左に掲ぐ、頓りに同情の言語流行す。同情を平たく説けば、おもひやりの多き事なり、萬事お察しの宜き事なり、同じ人間に生れて同じ世の中にあるもの、わざ／＼俄に催促せられずとも、人として同情の念なかるべき、もし全然なしとすれば人にあらず、いはゆる無情漢なり、冷血動物なり。たゞ同情は相手より寄せらるゝを受くべきもの、受くる方より武者振付いて掻き取るべきものにあらず、下されば有難く頂戴すれど、いやといふ人の懷中に手を差込で掴むべきものにあらず、されど近來は貸した物を取るが如く殆ど強制的に同情を引出し廻る奴あり、また口先だけの同情を誰彼なしに總花的に振蒔いて、いよくといふ場合は敵に

かはりもの

追はるゝ如く遁け廻る奴たり、此ところ雙方より取るか取らるゝか腕次第の世の中、人間の最も美德とすべき同情の念は宛然これ賭博的の口を帯び来れり、さらに一面また同情は個人としての美德なれど、人類の總括上みだりに同情を乞ふものゝ多きは國家の不祥なり、同情を寄するもの多くして乞ふもの渺きは國家の幸福なり。

第一に同情を乞ふの前、その同情を乞ふに足るべき理由を備へざるべからず、自己の過失より起りし總ての失望と悲觀とに他人の同情を乞ふは、おのれ働かずして人の飯を盗み食ふが如し、あまり益の好過ぎた業ならずや。

また同情を寄する前、その同情を寄すべき理由と共に結果を考へざるべからず、たゞ叨りに憐みて事の善惡を問はざるは、眼前の小慈悲を以て將來の大不慈悲

を醸すの恐れあり、加之も餘り同情を寄せ過ぎて同情の種切となりし曉、自己また人の同情を乞はざるべからざるに至る、

されど今日の同情は理由の奈何に拘はらず、たゞ同情の用語のみを遺取して、人を恨む言葉にも必ず同情を擔ぎ出し、あの人は同情の念に乏しといふ、乏しくも乏しからざるも眞實の同情なるもの堀りぬき井戸の水と等しく無盡藏に湧いて出るものならむや。

蓋し同情の念慮は同情の効果を伴はざるべからず、あくまで同情は寄せて居りませんが諸どうも致し方が御座いませんといふ、かゝる同情を寄せられて何の有難かるべき、近來の同情は十中八九この同情なり。

黙つて居ても寄せらるゝ同情は謝絶するに及ばざれど、なるべく人は他に向ふ

かはりもの

かはりもの

て我より同情を乞ふべからず、同情を乞ふは既に何等か自己に缺陷あるがためにして、自己の缺陷は自己の填補を要す。

わけて近來の青年男女は小説的に文學趣味を履き違へて、失戀に同情し、悲觀に同情し、怨恨に同情し、自殺に同情し甚だしきは自暴自棄の墮落に同情し。

その最も甚だしき極端は許すべからざる狂罪にまで同情するが如き傾向あり、

かゝる傾向は同情の念にあらず實は同情病と稱すべき一種の悪疫流行なり、同情を寄すもの既に其悪疫に感染し、同情を寄せらるゝもの既に其悪疫の重き患者とすれば、同病相憫むの外、いかに何としても助かるべき筈なし、

また同情の念は同舟の誼と異なれり、同舟の誼は利害を共にせざるがため却て寄するものと寄せらるゝものとの間に效果あり、同じ事に倒れて泣く奴と泣く

奴との鉢合せは只これ涙の分量を増すのみ。

されど今日の同情を寄せ同情を乞ふもの、多くは實際に於て涙の分量を増加する以外、さらに何の效なく、つまり今日の同情は雙方お互に氣休めの泣き合ひなり、また同情といへる萬事に都合よき美名を振廻して世の中を賑はせる一種のお祭り道具なり。

元來の不具者でもなく不慮の天災にも遭はざるものが、同じ人間の吸ひ残せる餘汁を貰ひ受けて我咽喉を濕さむとするが如きは、結局、あまりに自己を見放し過ぎたる薄情者なり、あまりに自己を見下け過ぎたる無禮者なり、由來、薄情と無禮は他人に對する惡徳なりしが、もはや今日は狼狽て自己に遠慮なく持出す世の中となれり。

かはりもの

◎成金

成金とは将棋の駒よりの出でたる語にして盤面の雑兵葉武者に等しき奴、即ち符なるもの一轉して運よく金と成れるといふ、昔の諺これを成上り者と稱し、古今ともに成の字を冠するは、そもくいかなる意味を含めりや。

蓋し富は一朝一夕に得られざる者とし、絶へず間斷なき努力を長き歲月の上積重ねて次第に膨脹すべき筈の順序を飛越え、ひよっこり一擱みに案外の金持となるがため、世間これに驚き半分の冷語を用ひて成金と稱すれど、實は成金なるもの決して卑しむべきにあらず、寧ろ成金は或場合に於ける奮闘的の飛將軍にして、まぬけ野郎の揃ひし中に何等かの機會を捉へつゝ不意に躍り出でたる奇勝者なり。

加之も經濟状態は鎖國時代の昔と違ひ、廣く港外に世界を相手とせる今日、俄に腹の膨れし奴が必ずしも同胞の生血を吸ひ取りし奴といふべからず、却つて一人なりとも我同胞中に大なる成金の増加するは國家隆盛の反影なり。これを直ちに目の敵として成金成金と憎むが如きは、甚だ自己の手腕なき貧弱を示すと共に動ともすれば内心に女々しく人の手柄を羨む嫉妬的の響あるに似たり。されど成金の語また例の濫用に過ぎて、これを叫ぶ奴の大安賣より來りしがため、わづかの金を掴みしものを見ても忽ち成金と稱し、取るに足らざる一時の酒色を見ても成金と稱し、馬鹿ものゝ虚榮に誇る衣服を見ても成金と稱し、家を新築すれば成金、書畫を買へば成金、別荘を作れば成金、自動車に乗れば成金、つまり内容の充實せる成金の多きにあらずして成金といふ語の多きに由

かはりもの

稱するものは成金の程度を知らずして自己の素寒貧より割出すがため、たゞ徒らに羨み徒らに妬み稱せらるゝ者は、成金の分量を知らずして夢中に浮かれ出すがため、たゞ徒に誇り徒に威張り返す、互に根性の小さい奴等が雙方より睨み合ふて、ますます成金の用語を多からしめ、ますます成金の空騒ぎを大ならしむ。

天下幾人といふ富豪の傍若無人に對して其横暴を攻撃するは別論なれど、うよゝと蠢動せる空威張りの成金振に向ふて、さも大敵の現はれしが如く、目を敬て、これがために見苦しく立騒ぐは、あまりに意久地なしの骨頂といふべくいかにも恥しき次第ならずや、

たとひ實際の大成金ありとするも、一朝の成金は一朝の成貧となるべき意味を有せるのみならず、むざ／＼其奴を癩に觸て入らざる苦勞するよりは、意氣壯快、度量寛大、をりをりあゝいふ奴の不意に飛出すも亦これ人生の波瀾、寧ろ面白き經濟界の一興と見るべし。

●落伍者

今日の社會を競争場裡として、優勝者のあると共に落伍者のあるべきは當然の理なれど、落伍者これを敗残者と稱すれば、殆ど世に用なき人間となり、さらに落魄と稱すれば、また一倍に人生の悲惨を加ふ。

たとひ優勝者たらざるも、せめて人間この落魄の文字に終るべからず、落魄は世俗におちぶれたと解釋し、いかにも貧弱に瘦こけたる無爲無能の面影を現

かはりもの

かはりもの

はして、實際その日食ふや食はずに彷徨ふもの多し。

結局、落果てた人間に再び浮び上もの少く、十中八九、あはれや其まゝなり。

落ちて浮ぶものは、その道行に落ち工合の曲折波瀾あり、その落ちたところに落ぶれやうの趣味段落あり、

落ちて再び浮ばぬものは、別に曲折波瀾の落ち工合もなく趣味段落の落ぶれやうもなく、たゞ無意味に無雑作に、づるづると落込みてひよろ／＼とせり。

つまり落ちしにあらず、その人の落つべきところに落着きしなり、そこが即ち本人に最も適當なる居處なり。

人間は進歩すべき約束の下に生れて、いかなる時代にも退歩すべきものにはあらず、たゞ途中の障害物に遭ひ、これと奮闘するがため、或は躊躇し或は休止

し或は後れ或は退くのみ、その時に死せざるかぎり、いづれも一時的の現象に

して永久的の寂滅にあらず、また人間の最も價値あるべき點は其時なり、さる

を世の中に落魄せる者、多くは此障害物なくして自然に退歩し無事に轉下す、詮じ來れば前後の思慮なき不用意の怠慢者なり。

祖先の財産、父兄の養護、その他いづれも自己の力にあらずして華奢全盛を極

め、竟に見る影もなく落魄せるもの多きは、いはゆる川柳に「昔は何のなにが

し今は何もなし、」かゝる奴に限りて現在の恥を恥と思はず、常に絶えず夢と過

ぎし過去の全盛を誇りて、ます／＼自己の馬鹿さ加減を世に笑はれ、笑はれて

猶かつ覺らず、まさか今更ら頭を下けて人にも使はれずといふ、たとひ頸骨の

折れるほど頭を下けても誰が使ふべきや、實は使ひ道のない人間なり、紙屑は

かはりもの

かはりもの

●目方次第で錢になれど、人間の屑は度量にかけても賣れる筈なし、また他力によらず自力に全盛を極めて、一朝の失敗に落魄するものは、多くの場合、人間の落魄にあらずして事業の失敗なり、若しくは人力以外の天災悲運なり、いづれか多少の挽回すべき前途を有しその豪なるものは寧ろ激發奮勵して捲土重來の快を演じ、其まゝ再び自立し得ざるものこれを使へば必ず使はるゝ人間なり。

もし一代の英雄にして末路の荒寥寂寞たるものありとすれば、これ英雄の罪にあらずして多くは時勢の變遷なり、只この時代の推移に應じ、時勢の變遷に伴はざりしのみ、これを人生の意外より大觀すれば、もはや役目の濟みしものなり、既に役目の濟みし自己を知らずして、徒に苦惱煩悶するものは元來の英雄

にあらず、英雄こゝに首を回らせば是れ神仙たるべき筈なり。

たゞ世の中に哀れなる偽英雄の末路にして、つまり豪傑の出來損ひは普通の常人よりも慘澹たる落魄あり、いはゆる蟹の目の上にのみ飛出して猿の手の尻に及ばざるの語、また虎を描いて猫にも類せざる語、これは一時の英雄豪傑と呼ばれし質物料を浮世の算盤に引去られたるものにして、勘定残りに鏝一文の價なきを奈何せむ。

脇目も觸らず一生懸命に働いて正直一途に世を涉り乍ら避け難き天災人禍に逢うて頼る淺なき孤影孤獨の老衰疾病に落込むものは、共同生活の人道上これを見殺しにすべからず、個人としては富豪なるものあり國家としては救済の方法を講ずべき當路者あり、もし應ぜざれば宜しく鼓を鳴らして攻むべし。

かはりもの

かはりもの

されば健全なる身體を以て食を他に乞ふものあらば、うかうか仁侠の美名に溺れて流るべからず、臍腰達者の乞食に物を施すは悪田に苗を植付けけるが如し落魄困窮、あの人が現在あゝなる筈なしと思へど、仔細に其過去を點検すれば十中の八九、さうなるべき、事實ありて現在さうなれる人なり、たとひ一時急を救ふとも、半以上、また過去を繰返して將來さうなるべき筈の人多し。目的のため希望のため一時の落魄するもの、實は落魄にあらず、いはゆる尺蠖蟲の屈する所以にして、何の目的もなく希望もなく、只これ茫然と落魄するものは沈むべき筈の石を水中に投ぜしと一般、これは逆も浮ぶ瀬なし。

○人間の年齢

人間の年齢は戸籍面に明記され親戚朋友の間に熟知せられあかの他人の目にも

其容姿を見て多く違はず、中らずと雖も遠からざる程度に秘す事の出来ざるもの、加之も一定せる自然の順序を追ふて少年より老年に至り、老年も約束通りの墓場に歩み行きて死に終る。人生を五十年とし、七十年古來の稀とし、百歳の生命を保つは殆ど一種の奇蹟とすれば、その百歳は僅かに三萬六千日宗教的の悲觀者これを電光朝露の如しといふ。

さらに他の動物と比較すれば、八百年より千年に至るべき鯨あり二百年より五百年に達する鶴あり、百年より四百年に及ぶべき象あり、鸚鵡と鷺と鴉さへ三十年より百年に届くべきものあるを思へば、全世界に向ふて英國の誇りとせる有名の一トーマスボールは百四十二歳に止まり、聖書にあるアブラハムは百二十

かはりもの

かはりもの

五歳、二千五百餘年間の我歴史上に世の長人と崇められ建國以來の一人として殆ど神仙化された竹内宿彌は三百歳、稱すれど、その眞偽いまだ知れ難く、たとひ三百年に懸値なしとするも、鯨のためには赤ん坊といはれざるべからず、五百年に達する鶴と四百年に及ぶ象よりは、青年扱ひを受けざるべからず、もし世間普通の人生五十年とすれば、鷲や鴉の長命にも劣りて、おい人間どの馬鹿に早死だねと、悔み狀を頂戴せざるべからず、いかにも心細き次第ならずや。秦の始皇が徐福に命じて蓬萊に求めむとせし不老不死の仙薬も、獨逸の鍊金家ペールスが鹽と硫黄と水銀を以て無窮長壽の靈薬を製せむとせしも、瑞西のバラセルサスが萬病驅除の神薬を發明せむとせしも、ヘルモットが化學應用の上より人間の死を永久に防がむとせしも、その他また我國に傳へられたる神々の

天壽薬も延命薬も、結局は古今東西いづれも悉く失敗に終りしかため、近來の泰西學者これを残念に口惜がりて發表せる説に曰く、人間は發育成長すべき期間に五倍したるものを命數とし十倍したるものを極度として、丁年の十倍、即ち二百歳まで生き得べきものとすれど、説は説に過ぎず只これ學者の理想に止まり實際いまだ二百歳の長壽を保ちしものなきのみか、各國の統計表は寧ろ年々その死亡率の早きを示せり。

蓋し社會の進歩は人生の複雑を來して、心身疲勞の結果、いよく古人よりも健康を失ひ、ます／＼今人に疾病の多きを加へ、衛生思想の普及と反比例の頗ぶる長命の數を減じ、交通機關の發達に伴なひ交際頻繁の密接に従かふて、その一例を我國に擧ぐれば、恐るべき肺結核の如きもの殆ど今日の國民病となれ

かはりもの

り。

されど人間は宇宙間の生物中、最も優秀卓越せる高等動物なるがため、強ち生命消耗の早きを以て悲観すべからず、寧ろ百歳を保たざるところに他の動物よりも偉大なる意義を含み、また今人の古人に及ばざるは只これ單に年齢の比較のみ、そもく生けるといふ生存の價値に於ては却つて長く、いはゆる時間は短縮すれど、能率は増進せり。

昔は今よりも長壽者ありしが、五十前後に隱居せるもの多く、甚だしきは若隱居と稱する無用物の存在せるに反し、今日は社會と没交渉の無能物に敬意を拂ふべき餘地なく、人は死に至るまで間斷なく活動せざるべからず、これを善意に講ずれば人間ますます向上發展し、もし惡くいへば餘儀なく引ずられて一日

の安樂もなく、あはれや生涯を其まゝ働き死に死すべき世の中となれり。

たとひ生涯働き死に死すとも、いやく泣面をして引ずられ行くべからず、その働きに絶へず何等かの希望と快樂を有し、その引ずられ工合に面白き一種の趣味を加へ、これを内部の勇氣と元氣に張詰めて進めば、案外この人間は老衰せざるものにして、常に生々と若々しき血色を湛へ、老いて益々壯なるの勢ひ寧ろ年齢に逆行し得べく、たしかに人は心を以て或程度まで老を防ぐに足る、年と共に衰へ行くは自然の數理とし世間普通の當然として徒に容色衰退の歎を發し意氣消沈の感を深くするものは、もはや人生の用を捨て、自己みづから墓場へ急ける凹垂れ老爺なり。

老て衰弱するは年數の順序なれど、人間この一點のみは正當に順序を守るべか

かはりもの

らず、無遠慮に正當に踏潰し會釋なく順序を踏破りて老と戦ひ老と争ひ老に屈せず老を騙逐すべし、古今の偉人と稱せられて世俗に超凡せるものは、その超凡せる事業以外、老の來るを知らざるが如き勇氣勃勃にありて、老と共に衰退すれば、たゞの年寄なり、昔は一時の花を咲かしたにせよ、今は梅干となれるのみ。

或元氣老爺が宴會の席上、寒中の裸踊を演じながら朗々と唄ふて曰く『四十五十は鼻垂れ小僧男盛りは眞ヅ八十』

少々は憎まれても邪魔にされても若い奴等に負けず劣らず大に世の中へ禿頭の光輝を放ちて、この元氣なかるべからず、面に皺の寄るは心の緊張せざるがためなり、腰の屈むは川なくして働かざるにあり、たとひ生活問題に何等の顧慮なきもの

きものと雖も、生命の持續するかぎりには社會に活動するを以て人間の誇りとすべく、また活動の休止は直に人間の老衰を來しいかに長壽たりとも早老は生命の意義に於て短命なり。

この理より見れば、今日の生存競争と生活問題とは人間を呪へる者にあらず、寧ろ早老せざる生命の幸福とし支柱すべく、たとひ苦みながらも生涯を活動するもの、その苦中に却て閑人の知らざる快樂ありて、世に忙しきものは、老の到るを忘れ、襖と障子も絶へず開閉すれば滑らかに動き、汽車の往來せざるレールは錆びて空屋の戸は早く腐り易し。

老人この元氣を喚起すれば、猶かつ老朽を防ぐに足るべき今日、何事ぞ、生若い身に人事一切を空熊の如く居縮みて、たゞ空しく閉塞主義の若朽者となるも

かはりもの

かはりもの

の多きは、いかにも意久地なしの極といふべし。

馬鹿さ加減

流行と大勢とは全然その根底も結果も違つて居るが、ちよいと見て色合と柔か味の相似たるがため味噌も糞も同じやうに心得てる今日の世間、どうかすると往々この大勢と流行を同一視するの恐れがある。

そこで我輩は常に大勢の置去に逢はざるやう心掛けて居ると共に、また何事も眼前の流行に溺れざる事を一種の誇りとして居たところが、何ぞ圖らんやで、今度の流行感冒だけは流石の頑健なる我輩も遣られた、しかし元來お粗末に出来た身體だから、肺炎なつかといふ上品な病氣に變ずる氣遣ひはない、一夜三十九度以上の熱になつた時、聊か手足がダルいと思つたくらるで、心易い醫者

かはりもの

かはりもの

と喧嘩腰に薬も飲まず、心配する家人を吐り飛ばして我流の反對療治を行ふこと三日間、ひよっこりと癒って仕舞った、醫者も家人も呆れたらうが、實は風の神が呆れて遁けたのだ。

この醫者は我輩の親友で、世間には立派な博士を以て尊敬を拂はれて居るから近來の流行感冒に猶更ら四方よりの引ッ張風となり、殆ど目の舞るやうな忙がしい中をワザ／＼親切に抜けて来てくれたに拘はらず、いふ事も聞かず薬も飲まないので大に怒って、君のやうな野蠻人に文明の醫藥は無用だといふ皮肉の一言を残して歸ったが、やはり氣になると見えて頻りに電話をかけてくる、家人また頻りに電話で素人考へな事を報告して居るから、二日目の三十八度六分になつた時、我輩みづから電話口に出かけて曰く『文明的の心配は有難いが大

丈夫だよ君、ことしは申歳で我々人間の祖先を進化論より來りし猿とすれば、つまり原始的の自然療法に捨て置けば宜いんだ、きつと翌日は癒るに極つてゐるから安心してくれ、本人のいふ事に間違ひはない』忽ち電話に響く大喝一聲、『馬鹿野郎 勝手にしろッ』その翌日、この馬鹿野郎め、いよく勝手に癒って仕舞った。

三日目の朝、湯殿に飛込で例の通り全身磨擦を遣らうとすると、家人は驚いて總掛りに差止める、衆寡適せず、仕方なしに髻だけ剃って衣類を着替へのこのこ外へ出やうとすれば、妻は目を丸くして引止める『あなた、どこへ往らッしやる』我輩これに答へて曰く『野蠻人の幸福なる事を文明的の醫者へ参考のため見せに行くんだ』とんでもない、さういふ亂暴な事がありますか、御自分の

かはりもの

身體を粗末にするばかりでなく、第一また現在お友達の御親切に對して濟まな
いぢやありませんか、だうしても今日は出しません、あなたは兎も角、わたく
しが付て居て、そんな事されては困ります、どうかもう、二三日の間、病人ら
しく仕て居て下さい、馬鹿な事いふな、三十九度の熱で寝ない乃公が達者にな
つて病人の眞似をして居れるかい、居れても居れなくつても熱の後が大事です
よ、その大事は過ぎて仕舞つた、全體あの熱は風の神め、どツか神経質の弱は
い奴を斃しに行く途中、ちよいと乃公のところへ道寄り仕てフザけに来やアが
つたんだ、ところが乃公の身體は病の器に出来て居ないからね、こりやア間違
つたと驚いて飛出したんだよ、狼狽て急に飛出したから宜かつたが、もし風の
神め慌てずに悠々と考へて出れば出がけの駄賃だ、お前に取つ付たかも知れな

いぜかういふ、丈夫な旦那殿を持つて幸福だ、感謝しろといへば、妻は其まま
黙つて仕舞つて二度と口を聞かない、しかし油断なく玄關口に見張番を置いて一
歩も外へ出さない。

もはや大手を塞がれたから、大將、密かに搦め手より脱れ出でんとすれば、細
君腹心の下女ども臺所口を用心堅固に守つて居る、前後遮断、これを強て家長
たるの權柄づくに突破せんとすれば、勢ひ夫婦喧嘩にならざるを得ない形勢だ
から、わざわざ夫婦喧嘩まで仕て友達の醫者へ憎まれに行くは聊か愚なりと心
得、已むを得ず一日だけ神妙に書齋へ閉籠つてやつた、やつたとは言へない譯
だが、なるべく恩に着せて、ぢやア仕方なしに閉籠つてやると稱した、

もし今日の新しい女で、たとひ朝寝は仕ても世の中の事に目覺めたといふ相手

かはりもの

なら、すぐに侮辱したとか蹂躪したとか騒で、忽ち離婚問題が持上るだらう。以上は一月二十日にあつた我家の實際で、家庭といふものを理窟詰の寄木細工に等しく拵へてる世間の人から見れば、あまり不真面目に馬鹿けたるが如く考へられ、また殆ど一場の滑稽談ではないかと思はれるだらうが、妻に對し家族に對して何等の修飾なく顧慮なく何等の遠慮會釋なき適意自在の我輩はありのまゝ常に斯の如き赤裸々の稚氣を以て二十年來いまだ一度も實際の風波を起した事がない。

そも、家庭の圓滿なつかといふ事は、犬がチン／＼したほどの手柄にも自慢にもなるべきものでなく、人として一家を構へた以上は、あたりまへの事で實際また別に難かしい藝でも何でもない、それを近來どういふ理由か、いたると

ころに喧ましく叫ばれて、わざ／＼大業に論評されたり研究されたりするのが無頓着なる我輩として不思議でならない。

門外一步の世間は人類の競争で或意味に於ける戦場の勝敗だから、逆も宗教家の注文通りには行かず、勢ひ餘儀なく不圓滿に渉る事も多いが、社會の奮闘に勞れたる心身を休養すべき自分の家に歸つて他人でもない自分の妻子眷族と圓滿を缺くといふのは、缺く奴に必ず何か缺べき暗い事と悪い事のあるからで、別に暗い事も悪い事もなくて一家圓滿にならないのは、つまり家長たるものに一家を保つべき資格なく能力なきためと見るの外はない。

たとひ嬢アが少々お轉婆で始末に終へない女としたところが、喧嘩する氣で嫁に來ない以上、これが亭主たるもの多年の間に導いて感化する方法は幾何もあ

かはりもの

かはりもの

る、ないといふのは出来ない奴の言草で、いはゆる嬖ア天下に虐けられ終生その尻の下に敷かるゝを光榮とする野郎これもまた一種の家庭圓滿策といふべしだ、はゝゝゝ。

や、うかく、饒舌ッて餘計な人の事に及んだが、ついでたからもう一個こゝで我輩の馬鹿けたところを、白狀しやう。

どう間違つたものか世間では大變な酒豪の如くに傳へられて居る我輩は案外その反對の下戸で一滴も飲まないが、をりくゝ酒容の醉態以上に氣の向て面白くなる時は妻子家人を集めて置いて、その前で裸踊りを演ずる事がある、しかし狂氣でもないから、さんざ踊りぬいて草臥れた後は其まゝの丸裸の胡坐を搔て曰く、「どうださのみ、身體は大きくないが骨格の逞ましき工合と筋肉の張切つた

かはりもの

るところを世間普通の年齢に比べて見ろ、この誇るべき強壯體の所有者を夫とし父とすれば安心だらう、併せて乃公は乃公を産出し玉ふた父母に感謝して満足を表現するため。をりくゝかういふ調子に歡喜の餘り我を忘れて踊り出すんだ、人生あらゆる總ての出発點も終點も只これ身體の健全にありとすれば、年々さらに衰へざる乃公の裸踊りは決して冗談半分の洒落でない、自分の元氣旺盛を發揮し祝福すると共に結局お前達にも斯の如き夫を持ち親を持るといふ意を強くせしめて前途益々獎勵するんだから、其覺悟で妻は愉快に乃公を扶け子供等は愉快に勉強しろ、わかッたか、わかッたら、もう一番、踊ッて見せてやる」かういふ工合に調子づいて來ると、實際また我ながら面白くなつて、三十分ぐらゐは踊り續ける事がある、寒中でも汗びツしよりだ、ところで我輩の踊り終

るを、さも待乗ねたといはないばかりに妻は慌て、着物を着せに来る、子どもは羽織を持つて来る帯を持つて来る足袋を持つて来る、いやはや、さかさまに親たる我輩が腕白小僧の取扱ひを受ける始末で、其時に妻の言草が極つて「あなた、内では見馴れて居りますから構ひませんが、若外で踊つたりなさると困りますよ。』いくら恍けた我輩でも、まさか白晝に他人の前で裸踊りの勇氣はない。加之も長男は中學生徒で、そろそろ生意氣になつてゐるから我輩の裸踊りを眞正面に見物し居れない、必ず面を敷めて横を向きながらこれだけは阿父の病氣だらうと諦めたやうな顔をする、さらに長女は年頃と来て猶更の事、いくら見ろといふても二三年以來、踊り出すや否、きつと近所へ遁出して行く、就中、末子は五歳で、動もすると親の眞似をして時を構はず丸裸に踊り出す癖が付たか

ら。こりやア堪らないと流石の我輩も聊か面目ない氣がして、去年かぎり一切この裸踊りを止めて仕舞つた、

しかし我輩の一家族二十三人、をりくこの理窟を離れて馬鹿けたる主人公の裸踊りを演ずるため、何の隔意なく自然に打解けて、笑語满堂不斷春といふ我輩の一句を實際に現出し、絶へず陽氣に嬉々として未だ一人の惰氣返つたり鬱ぎ込だりしたものはない、つまり一種の緩和劑となり興和劑となり時には活氣横溢の獎勵劑ともなり興奮劑ともなつて来たが、五歳の末子に無言の諫めを呈せられ、残念ながら去年かぎり止めて仕舞つたので、今後、どういふ事を遣らうかと考へて居る鼻頭へ妻は頻りに手を振つて「もう澤山です、あの裸踊りに代るやうな事は、どうせ、ろくな藝では御座いますまいから、考へずに置いて

下さい、娘も段々と年頃になつて來ましたし、この上また變に妙な眞似をなさると嫁に貰ひ人もなくなり、長男の方だつて頼りに心配して居りますよ、うツかり友達を連れて來た時、もし阿父に例の病氣を出されちやア僕の品行上に關する、第一また學校の先生に知たら試験の點數にも響だらうと申してね、たとひ嘘にもせよ、これには我輩も閉口して、おもはず苦笑せざるを得ない。なるほど、萬事を赤裸々の無遠慮に打割つた一家内の笑ひ事としては、をりをり我輩の裸踊りも杓子定規の道學先生に解し得ざる多少の效能あつたに相違ないが、丸裸に汗びツしより、手足を跳廻つてる最中、又々立關に客の來た時なンか、取次に出た者の慌てやうと妻の狼狽へやうは實に氣の毒な事もあつた。それほどだから無論また家族のものは秘密にして居つた筈を、どうして漏れた

か我輩の裸踊りは友人間に知られて居たらしい、現に去年この世を去つた和田垣博士の如きは、有名な大酒家で加之も學者肌には寧ろ珍らしい洒落氣の多い捌けた人で、おまけに酔つて來ると、なか／＼悪戯を遣る、或時、夜の二時過で内家の熟睡中、俄かの不意に電話の鳴る音が激しく聞えたから、何事が起つたかと襯衣のまゝ出て見ると、これも友人の松永某方に飲で居た夜明しの博士だ「やア浪六君、惜むらくば好男子いまだ酒を知らず、あたり裸踊りの妙藝も花に香なきが如し、もし君にして飲でくれると實に我輩の立役者たるべきを千秋の遺憾この一快物を逸せり、さよなら、いづれ明日」かういふ工合に或方面へは我輩の裸踊りなるもの随分と名高くなつて居るから、今更ら隠すにも及ばないが、實際に去年かぎり止めた事だけは承知して貰ひたい。

かはりもの

年が年中、苦蟲を嚙潰したやうな面をして家人に戦々競々たらしむるは、つまり浮世の浪風を漕で行く船長の最も航海術に拙劣なるもので、第一また自分も不安心で不愉快で堪るまいから、なるべく恬淡に碎けて快活に打解けて面白く、たまには家内中で坐り相撲でも取るくらゐの雅量と餘裕がなくては無効だ、それで居てこゝといふ、一家經濟の急所を弛めず、また家長たるの威厳も損ぜざるものにして初めて激烈なる社會の競争場裡にも立ち家に歸りては妻子眷族に和氣陽々たる生涯の慰安を與へ得るのである、絶へず口を尖らし目を三角にして家内中を睨み廻す奴に限り世間へ出ると案外に意久地なしの弱蟲が多い、つまり外で睨みの利かない弱い奴だから手向ひの仕ない内で妻子に向つて空威張に威張るんだらうが威張られる家人こそ災難だ。

阿字門

浪六著

其一

献上鯛一枚が百兩に飛ぶ花のお江戸の中央にも、四刃の家賃を拂ひかねたる裏屋住居、燈火さへ事なき宵の油を惜しめば、雨漏る軒に師走の月さし入りて、去歳のまゝなる古袷の袖に白く照らすも哀れ果敢なし、主人の勘藏まだ歸らねば、火の氣もなき空巢守の女房お千代只一人、昨日今日は一入さらに身の瘦覺えながらとても届ぬ心くよく、つい鼻の先に押し寄せ今年暮の峠やら、やがて間もなき春の朝の用意やら、かく成り果し今もなほ已ぬ

かはりもの

かはりもの

良人の大酒やら、すぎし昔に變らぬ我身の上の不運やら、さらぬも浮世の因果を、含む師走の空とて、かきあつめたる心の憂飾しけき折しもあれ、近所合壁の針手もきかぬ石臼鼻が男まじくら質種を酒にして、明日をも知ぬ面白けの大口どツと高く笑ふ聲に、お千代しみく悲しく辛く身に徹へて、あゝ胸いたや、闇の澤邊の螢、この裏の珠玉、磨かねど自然の光あつて年は二十四、心は優し氣は堅し、あれで味噌粥さけて雪花菜の使ひとは、惜しいものぢやの是沙汰すぎて勿體ないと、路地口さしのぞいて舌鼓うつ男の風聞たえねば、長屏中の鼻衆も良人を尻に敷く自慢談話の真先には、いつもお千代の陰口たゝいて指さしつつ、あの酔泥い怠惰生に何處が善うて連れ添ふやら、なんほ飲んでも堀抜井戸そこはかとなく沁み込むを、呆れぬ女房なほさらの呆れもの、第一が親への

不孝、折角うみつけられた花の姿が何の用ぞと、きく度毎にお千代が苦しき切なさ腹立たしき、えゝ酒といふもの世の中に無いならば、更け行く冬の月代いよく高く冴えて、屋根の瓦も霜の化粧や施ぬらむ頃となれば、さしも騒ぎし裏屋ひつそりとして、夜寒を誘ふ初夜の鐘の音かすかに響き、おもての大道筋に火の用心の拍子木ちかく、横町の辻に犬の遠吠え、壁一重鄰家の軒聲まで手に取る如く、やう／＼燈火は點けながら淋しさ、いと身添うて、歪みし箱火鉢の埋火を掻き起しつつ、またもや物の悲哀に沈む折しも路地口の燈片は正しく良人の歸家と、出でて手口に停めば、米櫃に蜘蛛の巢は張るとも自己の口に酒の香たえぬ勘藏が、今夜にかぎりて元氣もなき垂首の姿しをく、お千代みるより思はず走せ寄つて聲せはしう、

かはりもの

かはりもの

「おゝ御戻りなされたかさぞ寒からう」

いへども更に何の答辭もなく、そのまゝ家内に入るを追ひ縋つて、燈火かきたつてつゝ良人の顔を見れば、鬼のやうなる兩眼に涙いッはい溢るゝばかりに満しぬ、さらぬも破れ世帯を飲んで飲んで飲み潰す良人の大酒も、どうぞ身の害にならぬほどの寢酒にして、好きな下物の一つ二つ安樂にとこそ念へ、夢さらく憎うて怒恨に泣かぬ妻の千代、まして今宵の良人が兩眼の涙に、我まづ胸の悲しさ覺えつゝ、膝すり寄せて顔うち守り、

「これ何となされた、男の貴方が泣くほどの事、女の妾に埒のあかう筈もなけれど、連れ添ふ女房ちや、きかいでは濟まぬ、いうて下され」
しきりに問ひかゝれど、勘藏いよく兩腕を組んで無言の體、

「さてはまた平生の一徹短慮に争闘でもなされたか、敵手が多くて手籠めにでも逢はれた口惜しさか、おもはぬ災難ふりかゝつての無念さか、但しは年寄られた伯母様、もし火急に還らぬ不吉でもあつてか」
心に浮び身に知るほどの事、いちく數へて詰れども、息さへ出さず首を振つての顔色ますく青く、果てはそのまゝ身を抛けて大の字となり、荒土の喰み出でし天井を、一心不亂に睨みつめたる訝しさ、それを疊みかけて根強く問ふは却つて異なるもの、氣さへ直らば尋ねずとも聞かざるべしと、破れ戸棚より薄き煎餅蒲團を引き出しつゝ良人の裾邊に廻りて靜に打ち着せながら片隅に身を縦めて缺土瓶の下に消炭おしこみ、しきりに火を吹く妻が後姿、解かば丈にも餘る黒髪みだれて此頃の苦勞に瘦せたる肩を這ひ、あたら色艶むざんに褪めし

かはりもの

かはりもの

を惜しとも思はで、月雪花を餘所にして師走の寒天に古拾一枚、かゝる夜深にまで男甲斐なき我の歸家を嬉しう待ち受けて、水くらはさうともいはず、わざく熱き茶を汲んで呉れうの貞心、今更骨身に徹へて年月の酔ひや醒めけむ勘藏じつと見詰めし兩眼を閉づるや否や、がばと跳ね起きて、こらへに堪へし溜涙ほろくと頬を傳ひぬ。

「お千代、佛神かけて禁酒する」

今か今かと心に祈りし良人の聲、しかも禁酒といふ聲に、妻の身は絲ひく如く振り返つて膝頭つツかけ、その顔見上げて思はず瞳を張れば勘藏も起き直つたるまゝに妻の面を見下して聲くもらせ、

「お千代、悪かつた、許してくれ、この勘藏が三十一の今日今夜あらためて眞

人間、あゝそれも遅いか無念や、せめて一年前に和女の貞女が身に染むなら、この後悔も悲歎もあるまいに、これほどの心外を見まいもの、凡夫の尻舞ひ、下司の後智慧、もはや生涯に浮ぶ瀬もない、南無三寶の深水へ落ち込んだ」
いひつゝ又もや頭を垂れて腕を組めば、お千代その腕を搔き分けて自己が膝に引き添へつゝ、

「きかして下され、その後悔と無念の事情を、どのやうな心外に送はれてか、今が男の花の三十一で、生涯うかべぬ深水とは」

問ひ詰められて勘藏いよく遣る瀬なの身を震はし、兩の拳を握つて眼鼻の間を叩きながら、

「お千代、この五體の骨節が鳴る無念の底を絞れば、やッぱり酒、なれど差當

かはりもの

かはりもの

ツて今夜といふ今夜、貧の責苦に己が身は殺された、十兩の金が欲しい、一兩の小判あはして十枚、富貴には穴藏に錆び付いて夜啼きするさへ聞くに、なさけなや其金たつた十兩のため勘藏が生死を分つ地獄極樂、外でもない、此たび眞言宗の總本山紀州高野の靈場へ不動明王四尺の立像を安置せむとて、日本六十餘州の末寺末派へ残る方なき俄の沙汰は、あらゆる佛師に彫ませて十體より一體を選び、その一體を又もや十體あはして二度目の一體、三度四度五度と一粒選に選り抜いて。これぞ眞に毘盧遮那大會の持金剛、明王忿怒の法樂に叶ひて御像を、松華の嵐に傳へ三聚の燈火に照らして、刻みし佛師の名と共に末世末代までも残さむとは、お千代、我等の身に取つて生涯またとあらうか、一期の曠業おのれやれ、平生の泥酔どれほどの手を持つか心を持つか、この骨を

削り此肉むしつて人間の膾になるまでも、死物狂ひの精根、天晴れ遣つて退けう、とは思へども噫なんとせう金がない、今に始めぬ金がなければこそ、なアお千代、江戸三十八人の佛刻師いざといふ曉に負けぬ筈の勘藏が、今日まで七年のんだくれと唄はれて、金ある故の親方に追ひ使はれ、出来てからが生臭坊主の腰巾着、金箔ばかりで光る陀如來陀佛の下彫り荒削り、それも誰を怨まう酒の器の此の腐れ腸、あゝ是非もないとは諦めながら、もしやの一念に引かされて、親方に委細うちあけ、拜んで泣いて頼みまするの百萬遍も口説いた果が、一も二もなく止せ、世間に聞えた歴々の佛師さへ首を捻るに、おのれが其腕あつて堪るものか、十兩は儲おいて日傭の外、鏝一文も酒にする錢持たぬと言はれたのみか、満座の中で軒の雨漏る詮議より此床板の我けた吹聴まで

かはりもの

かはりもの

此奴を白癡の手下に皆のもの氣をつけよと、あまりの雑言愚口さんぐに、もはや此方も親方とは言はさず、一言二言の返答したが恩不知とて、七人といふ鐵拳の中央に取込められ、お千代、うたれた、蹴られた、踏んで叩いて引き摺り廻された怒恨の極印、これ見てくれ、無急な口惜しい残念な』

いひつゝ男泣きの大肌ぬいで現はせば、脊ともいはず胸といはず、脛腕に至るまで袋叩きの紫痣を残して生れついたる色白の肌、ありくと間隙もなく血筋を含む鐵拳の痕に、お千代わつと聲をあけて疊に喰ひ付きぬ、

其二

當時その名を知られし佛師の数は江戸に三十八人、京に五十六人、奈良と堺に

かはりもの

二十一人、その外、諸國諸州を合はして四十人とすれば、一人も外れぬ、段で百五十五體、そのうちの一體を高野に納めて二百兩なれど、残る百五十四體は入費のみの買上げか但しは持つて退いて他へ賣るかの勝手次第、されば金箔おいて艶を争ふ今時の佛師が手に、三月の食料もろとも木地一切を積つて十兩の身錢うかく、抛け出すべきか、出すほどの者ならば何れ逸物、それを三分と見て五十體前後の數取ながら、これさへ二百兩といふ金を彫り出さむ汚辱の慾心に、あはれ火生三昧に入る金剛手菩薩の御像が刻まるべきや、大智慧大法雨大定徳の大明王が、魔軍障碍の片端なる彼等が手業になるべきや、火焰青黒劍索の形は刻むとも威力悲徳もなき棚の置き念佛、思へば偕も氣の毒やら笑止やら口惜しいやら、わづか十兩の金に此の勘藏が可憎ら腕を殺すかと、膺ちぎれ

かはりもの

て皮肉の筋骨をどれども、天より降らず地よりも湧かず、降るは浮世の雨霰、湧くは涙の瀧津瀬、

其三

連れ添ふ妻に仔細うちあけて語りし後は、さすがに張り詰めし五體も俄に緩んでうたれし疵の痛疼を覺えつゝ、寝られぬ儘の兩眼見開いて半夜の面壁、曉の霜は衣手うすき肌を絞つて骨を刺せども、怨恨と無念の熱腸に額の汗を流し、をりく我を忘れて男泣きの聲に、死んだ死んだと叫ぶ悲哀の良人を、坐傍で見ると千代が心は何となる、

はや軒の寒雀さへづりて、長屋中かちくと燧石の音、やがて井戸端に水汲む

やら喚くやら、ならひ風はけしき師走の空の雲脚を逐うて出る男の聲々、あすの薪に柵板碎いても今日の間鍋の菜ごのみする鼻の聲々、さては三界の首枷が親をせがんで立騒ぐまで、こゝの浮世の夜は明けたれど昨夜のまゝの涙の座をも動かぬ良人と共に、我身も動かぬ千代が女の一念さらに何を思ひきりけむ戸の隙間より笑ふが如く射し入る朝日影、じつと恨めしげに見詰めながら、

「その十兩は妾が手で」

「やア何といふ」

「出来ました、出来さいでか、今日の今夜のうちに」

「お千代、どどどうして其金を」

「えゝ問うて下さるな、問はれては出来ぬ金、いうては猶更ら立たぬ金」

かはりもの

かはりもの

其四

親類といふもの事なき時は春なれど、まさかの折には花なき冬の枯木、まして草の由縁の妾が縁者に立寄る蔭は薄くとも、江戸中かけ廻って、父方母方の血筋七軒、泣いて口説いて甲斐がなければ日のある、ちに戻ります、よし夜に入つて戻らずば十兩たしかに出来たもの、あけの朝霜どこの他人にも踏まさで歸らうほどに夜一夜を心やすめて寝て下され、あゝこれにつけても思ひ出すは兩親のこと、薬でも木でも斯かる時に御坐らうなら、娘が連れ添ふ良人の浮沈、老の皮肉を撈つても餘所には見捨て給ふまいに、夫婦そろって親なし同胞なし、まことに山の落栗たゞ二個と、しをく、涙片手に出で行く妻の姿を見送つて勘藏おはず其影に手を合はして伏し拜みぬ、

かはりもの

出来たといふ十兩、いふまじと押し包む事の仔細を、あまりの不思議に責て問へば流石に女性なりけり、心は千萬無量にうれしけれども、きくほどの事が何の頼みになるべき、とても詮なき業とは知りながら、天晴貞節を無にはしがたく心に泣いて出しやつたる今日の一日、さぞや師走の風に吹き晒されむ、いちらしの女、かはいの女、あの姿をあのようにして斯かる苦勞の浪に漂はすも、七年夢中に喰らひ込んだる酒の害毒、本道奴悪魔奴と振り返つて家内を見廻せば諸道具を賣り拂うて悉く人手に渡りし中に唯こればかり寵を得て、しかも昨夜より用なきまゝの徒然に恨み顔なる貧乏徳利、えゝ貧乏とつく名の下に何の徳利があるものぞ、獅子身中の蟲、おのれと叫びつゝ引ッ摺んで庭口に抛け出せば、あやにくに備前の厚焼、石には當らで水溜の泥に無事息災、まだ我を迷は

かはりもの

す執念かと、再び手に取ッて怨敵退散の聲もろとも、うちおろす石上たちまち
 微塵に砕けども、砕がれぬは胸に蟠る一心なほも凝り固まつて軒より、空の日
 脚を仰ぎつゝ、獨言、未練ながら神も佛も千代の貞女を守らせ給へ、あはれ今日
 の涙の苦勞の甲斐をあらせ給へや、

やれ日は暮れぬ、ついでには妻の登音、今かくと待つも嫌なり待たぬも辛し、
 歸らずば此身の浮ぶ瀬、歸れば此身の沈む淵、生死一時たゞ今夜ぞと、始めに
 頼まぬ妻の言葉も今は頼みの一筋に、燈火を點け。門の戸も閉し、次第に夜は
 更け渡れども何の影なければ、勘藏おもはず我を忘れて起ツたり居たり、半ば
 祈る心の喜悅、半は歎く心の煩慮、さても半信半疑の中有に迷うて六疊一室の
 破疊を這ひ廻りつゝ、的もなき眼を見張り甲斐なき耳を欬て、胸には不斷の大

かはりもの

浪小浪をうたせながら、手足は忘れて捨て、他人の如くあれ、響くは初夜の鐘
 うれしや犬が當りし路地の戸口、ありがたや鼠が荒れし物音、願はくは、戀しの
 女房こゝに歸るなよ、辛くとも辛抱せよ、悲しくとも堪へてくれ、今夜一夜の
 其苦勞には行末この身の骨を粉にして報いむと待ちつゝ待たぬ長き夜を悶えし
 が、大願成就いつしか東天からりと明け放れぬ、

昨日の朝に引かへし今朝の勘藏、まだ長屋の夢は覺めざれど、鴉の啼く音に躍
 り上りつ、庭口に飛び下りて門口の戸を引き開ければ、いつのまに歸りけむ、
 妻の千代しよんほりと霜にうたれて停みぬ、

えゝなぜ聲かけぬぞと、抱くが如く手を取ッて引き入るれば、引き入れらるゝ
 まゝに坐しながら、身を捻り顔を背けて、懷中より差出す小判三十枚、

かはりもの

「これで男になつて下され、天晴れ日本一の佛師になつて下され」
 喜び勇んで金色の音ざら／＼、抛け出すべきを、うちしをれて唯これだけの言葉、しかも其聲うるんで鬢の手までも、震ひあとは唇しめて齒を噛み鳴らす訝しさに、勘藏じろ／＼小判の光輝と妻の色なき横顔とを見分けつゝ見此べつゝ傍にも寄らず手にも取らず。」

「お千代、この金、どこで、どうして、しかも十兩が三倍・親類か、」

「いゝえ」

「ふむ、縁者でなくば、あかの他人、その他人は誰ぞ、名を何といふ」

「かゝ勘忍して下され、貴方も知つての、あの隠居様から」
 「えゝツ」

あの隠居とは千代が十四の年より十八の曉まで、三年の奉公つとめし舊恩ながら、うまれついで的好色に六十の阪を越えても淫猥やまねば、主の威光の押附業に身を切らるゝ思ひ、はては一時半夜の夢も危きまゝの怖ろしさに、五年の約定あと二年を残して遁け出したる後さては、此家に人の妻と定まりし今でさへなほ、諦めぬ無法の横戀慕、をり／＼掛橋かけての文使ひにも、貧苦を見抜いた金といふ文字、隙間もなく竝べたてゝの仁者めいたる呵しさに、これが杖ついて出る花婚様の化物ぢやと、夫婦もろとも夜の襖の、寢物語りに笑ひし隠居、その隠居の手より轉がり出でし三十兩とは、無慙や千代、あはれ千代、

其五

あの隠居が手よりの三十兩と聞かや否や、勘藏はツと五臟六腑を絞る大息、宛かはりもの

ら必死の毒を舐めしが如き眼鼻口元かねて覺悟の、千代も今は絶え入る心地の身を抛け掛けて、良人の膝に取り付き喰ひ付き武者振りつき、流るゝ涙に音あらば聞えまじきまで悲歎の聲、

「氣を、氣を静めて、これ氣を静めて聞いて下され、十兩といふ金借るほどの親類あらば、えゝ三年前妾が怨敵の酒となつて、腹に、貴方の腹に這入つた筈今更ら七軒の血筋へ泣いたとて拜んだとて、貴方に連れ添ふ妾の口から、一日半日の貧の扶助にもならうか、夜に入つて歸らば十兩たしかというた時、妾は、千代は死んで居ましたぞや、またあの隠居様とて貴方も知つての通り、度々の人橋懸文を反故にしてからの昨夜、この口先ばかりで三十兩が出ませうか仔細は、出た仔細は、言はして下さるな拜みます」

一語一句に腸かき撈られて、感謝と怨恨と憤怒と成效との四心に身一個を縛られつゝ現の如く夢の如く、動きも得やらぬ良人の顔を、下より見上げて又もや泣き入る妻の千代

「これ今日から妾を無い物として、代りに出來た三十兩、それで、それで、貴方を立てゝ下され、貴方の眼前で咽喉ついて死んだとて。その死骸が二匁の錢にも賣られうか、生きて賣ればこそ三十兩、高價の廉價のは餘所の身の上、今こゝで何にも言うて下さるな、たゞ偏に祈るは高野とやらへ安置する明王の御像三十兩で出來るものなら三十兩かけて、天晴の佛刻師、七年のんだくれの貴方が日本一の名を聞きたい、總身へうけた紫痣に花の咲いた曉、踏まれて蹴られて引き摺り廻された怨敵の親方はじめ七人の、その七人奴の顔が見たい、そ

かはりもの

れを聞いて其顔みるまでは、いゝえ何の、なんの、もはや昨夜に死んだ千代が二度と再び死にませうか、一年半の賣證文で體は隠居様に貸したれど、魂魄はやっぱり貴方の女房、つきまとうて居ますぞや、また貴方の手になる明王の御像は、取も直さず妻を犠牲に供へて出来た御像、えゝ拙劣からう筈はない、日本一ぢや、日本一ぢや、肩胛張つて勇んで掛つて下され、ついては今もいふ通り、妾は隠居様に買ひ取られた奉公人、これから行きますぞや』
いち／＼眼を閉ぢて聞き入る勘藏、このとき兩眼くわつと見開いて、膝前なる三十兩を引ッ捌みしまゝ、

『お千代、噫この金が和女の身で、和女の身が、やがて大威大徳の不動明王かかたじけない尊や、むゝ何にも言はぬ、はやう行け、忘れても短氣すなよ、明王の御像みごとに刻めば、また元に戻つて清淨無垢の大事の妻、えッ行け、はやく行け、』

其六

凡下凡俗の惡臭むらくと煙の如く立昇る眞只中に五尺の形骸朽ち果つるまで蟲の如き小煩惱を戦はして、四里四方の墓に包まるゝ三尺入口の裏長屋、歪める廂と廂おち合つて軒と軒とを結ぶ古板壁の薄闇がり、晝さへ蝙蝠とぶかと疑ふ此奥の茅屋に、一念の大煩惱を發して妻の牛身を犠牲に備へつゝ無邊世界の威徳明王を刻まむとする男一貫ありと知るや否や、
汚辱の罪が形づくつて立喚く晝の間は、門の戸さしかたため窓を引き閉めて、我

かはりもの

かはりもの

のみの夜に心の熱火ををさめ身の節々を休むれども、萬籟園として四隣の物界すべて音なき夜中となれば、これを我のみの青天白日として起き上りつゝ、六枚の破聲を敷き詰めし荒薦の上、一面の土天井に張り切つたる白布の下、左右の大皿に油を湛へ、二十四筋の燈心に火を點じ、七個の小道具五個の大道具、側には生滅の火器、傍には、方圓の水器有無因縁の外に心を寄せ長短剛柔の表に氣を逸しつゝ、きよめに潔めし清淨の五體を其坐に構へて、こゝを觀法の定とも念じ感果の域とも思ひ、絶え間なき家内の紛々たる香煙に包まれながら、あはせて四十八筋の燈火に照らさるゝ顔面ながら朱を注ぐが如く、一世一代の熱血を額にあつめ身體髮膚の生氣を腫に注いで、ふけわたる霜夜に丁々と響かせし鑿の昔、さては鐵を削るべき厚刀薄刀の活動、螻蛄の虱の涙をも彫るべ

き精妙の氣魂、生命に代へて心に誓ひし百日の後を見れば、荒剝の大道白に似たりし一圍の木地は、七年のんだくれの勘藏が手にかゝつて、そのまゝ生けるが如き不動明王四尺の立像となりぬ、あはれ天下の佛刻師、いちく名があらば其名を聞きたし、

其七

我この腕この技を固より日本一と思はねば、我より優れ我に超えたる佛師はあらむ、されどこゝに我ほどの皮肉を絞り我ほどの熱血を瀉ぎしものやある、壇を構へ護摩を焚いて律式莊嚴を極めしものはありとも、抑も連添ふ妻の生身を犠牲に供へし悲慘の者やある、よし我この腕この技を凡下の下々の底に置くと

かはりもの

かはりもの

も、あはれ専念の感果に一心不亂の極まるどころ、或は大身を虚空の中に現じ或は小身を衆生の意に従ふときく明王の威徳に叶はゞ、金翅鳥が諸の毒惡を敵ふが如く我にも總ての汚穢を放れて清淨の境に達せむ、大龍の智雲を興して法雨を灑ぐが如く、我にも古今に逸して末代不滅を殘すの妙はあらむと、百日の氣魂を磨り潰して刻みあけたる四尺の立像を、塵塚の山なす裏長屋の奥より荷ぎ出して、江戸三十八人の佛刻師が天晴れ誇れる二十一體の間へ挿みぬ、人は知らねど明王が立ち給ふ金剛磐石の秘銘に手彫して阿字門かむさう作、

其八

まことの明王もしこゝに形を現じ給はゞ、忽ち我この作を抱へて立去り給ふべ

しとまで思ひ込んだる血肉銷磨の彫刻、どこに瑕瑾をば見出しけむ、おのれ如何なる眼をもて取捨の鏡みとせしか、但しは外の二十一體どれほどの妙あつてか、差出してより七日目の夕刻ものゝ、見事に外れし不用の一札來つて勘藏あつと血を吐きぬ、しかも合せて二十二體の中より一粒選の一體を何者の作と、思へば、江戸の佛師中に聞えたを有徳の奴、技術より先に金の光を現はしける、

其九

生涯一人の妻を生きながら殺して我も百夜の肝膽を絞りつゝ、こゝに始めて刻み上げたる一世一代の作よりも、佐渡から湧いた三十兩あのみまゝに授け出せばこの勘藏に日本一の名を呉れしやらむと、今は呆れに呆れて涙もなく、一たび

かはりもの

かはりもの

出せし明王の御像またもや背負うて元の裏屋に引込み、破畳六枚の中央に置き据ゑたるまゝ、天井に張れる白布を撈つて打着せ、その前に自己が身を横たへて踏んぞり返りぬ。

半日さながら息絶えしかと思はるゝ勘藏、夜ふけ人定まつて後、おのれ、おのれと呻るが如き憤聲もろとも、むくく起き上つて燈火かきたて、猪目するなる荒削りの斧を眞向に振りかざし、左手に白布を搔い取つて血走る、兩眼くわつと見開き、この勘藏も砕く、勿體なけれど御像も砕かせ給へ、一切すべて空々寂と叫ぶや否や、満身の太息ふくんで打ち下さむとすれば、木で作つたる四尺の大聖不動明王、ゆらくと動き出しぬ、木彫の立像うごくべき道理はなけれど、たしかに動いた、動いた、我ながら物凄く怖しきまでの名作、この勘藏

の眼に、動いた、動いた、

慈悲圓滿を包める忿怒暴悪の外相、炎々たる迦縷羅の焰を背に負うて、右に魔軍破碎の利劍を執り、左に法樂三昧の絹索を携へ、青黒の形を現して金剛磐石の上に立たせ給ふ御像、ふけわたる、夜の燈火に照らされて今更に生けるが如く勘藏、勘藏と宣ふ御聲この耳に響くが如く思へば、忽ち五體しびれて骨節ぞつと寒く、七年住み馴れし我家の内さへ襟髪掴んで虚空に引き揚げらるゝ、心地、我を忘れて聖無動大威怒と叫べば、持つたる斧は飛んで身は仰げに踏み倒れぬ。

其十

妻が生きたる屍を見捨て、自己が死せる兩脛踏み立て、明王の木像を布に包ん

かはりもの

かはりもの

で背に負ひ、一本の竹杖ついて遙けき雲の彼方に紀州の高野を望みつゝ、三十一の男、今日まで育ちし裏長屋を立出でしは、その年の櫻咲く彌生の空、江戸三界は春に酔うて浮世は夢と唱ふころなりき。

其十一

千年の青苔、觀法の定座、仰けば蓮華に似たる山また山の上たかく、俯して見れば法水を湛へし谷また谷の底ふかく、まことに眞言の修因、傳へきく大師の垂跡されば、淨戒の燈火は宇宙を照らして聖靈の慈雨は古今に及ぶと思へども、あはれ末世の今は此土も汚毒の棲家なりけり、勘藏が息をつくべき隙間もなくそのまま山を追ひ下されて、またもや拂ふが如く叩き出されし身の果いかになせ

りなむ、さては何處に四尺の木像を置かむ、天は高く地は廣けれど、

其十二

江戸に百日の熱血を知られず、高野三千の宗徒にしられぬ勘藏が、那智のお山に響く瀧津瀬と唄うてめぐる巡禮の少女に知られて、その瀧壺に浮びあがりし姿を見ればはや、死して還らぬ身は冷かなれど、荒繩をもて十重二十重に背負うたる明王の像は、なほ生けるが如く、傳へ傳へて世上に物の悲哀を流せし時こゝに始めて阿字門がむさう作の八字を讀まれぬ、しかも其身一代に此像一體の名作として、色なき血汐は凝固は長く高野の奥の院に光を放ちぬ。

かはりもの

かはりもの

其十三

勘藏が妻の千代、偕も其後いかにと問へば、世に知るものなく世に遣す形見もなく、たゞ住みし裏長屋の喚衆が口に、男を捨てゝ遁けたも道理、あたら花の埋木ぢやものと云はれぬ、もしその身の成る果を知らむとならば神も佛も入らぬこと、あの隠居様に問へ、あの隠居様に問へ、

八重の潮路

はしがき

人は時と境遇によりて物の憂さを殊にすれども、草の由緒もなき旅の空の哀れは誰も同じかるべし、わけて故郷遠き浪の上に行方も知らぬ身に乗せて、揮の雫も落つる涙も通ふ千鳥に訪はれし心は、胸に刻まるゝ無文の悲歌くりひろげて唄はずとも、折にふれ時に遇うて幾年の後までも消え遣らねば、また今更の心地して忘れがたし、

されば今日このごろ、秋は七草のもとに、鈴蟲、松蟲、さてはこほろぎの鳴く聲を聴きつゝ、根岸の里の草庵に衣香扇影を昨日の暮とすぎし燈火の下、

かはりもの

かはりもの

噫(あ)さても同じ(おな)じ時(とき)候(こう)なりけりと、古(ふる)き日(ひ)記(き)を繕(ひもと)いて我(われ)に伴(とも)ひし餘(よ)所の憂(うれ)目の一(ひと)節(ふし)を、これより書(か)き出(いだ)すこととせむ、

其(その)一(いち)

明治(めいし)二十(にじゅう)一(いち)年(ねん)といふ今(いま)を去(さ)ること三十(さんじゅう)年(ねん)の昔(むかし)、やうやう我(われ)も二十(にじゅう)歳(さい)を超(こ)えての五月(ごがつ)都(みやこ)門(かど)の景(けい)色(しき)を曉(あかつき)の寢(ね)覚(め)に思(おも)ひやりつゝ、ちらほらと、青(あお)葉(は)がくれに残(のこ)るの花(はな)も散(ち)りて、春(はる)ゆきし草(くさ)の軒(のき)端(は)に葺(ふ)き添(そ)ふる葛(あやめ)蒲(わ)の根(ね)さへ長(なが)雨(あめ)のころ、濡(ぬ)れし草(わら)鞋(ぢ)を山(さん)陽(やう)道(みち)に踏(ふ)み占(し)め、播(はり)磨(ま)路(ぢ)より備(び)前(ぜん)備(び)後(ご)を彷彿(ふたふた)うて安(あ)藝(ぎ)の國(くに)に人(ひと)入(い)り廣(ひろ)島(しま)の市(まち)街(が)に或(ある)人(ひと)を訪(たず)ひし甲(か)斐(ひ)もなう、その人(ひと)は事(こと)故(こ)ありて肥(ひ)後(ご)の熊(くま)本(もと)に旅(たび)立(た)ちし跡(あと)なれば、迎(むか)へも頼(たの)邊(べ)なき身(み)の同(おな)じうは雲(くも)にまかせて、いかなるべき末(すゑ)の運(うん)だめ、

しに水(みづ)や空(そら)なる對(むか)岸(がし)の伊(い)豫(よ)路(ぢ)に渡(わた)らむと、この三(さん)四(し)年(ねん)が程(ほど)は何(なに)事(こと)も破(やぶ)れかぶれの年(ねん)少(せう)氣(き)鏡(きやう)、わづかに振(ふ)り分(わけ)の荷(に)物(もの)をステツキの先(さき)にからけて、濱(はま)邊(べ)の汽(き)船(せん)問(もん)屋(や)に迎(むか)りつけば、こゝより三(さん)津(つ)濱(はま)へ夜(よ)毎(ごと)に通(か)よふ便(びん)は絶(た)えねど、その航(あ)價(ひ)を聞(き)いて男(をとこ)一(ひと)疋(びさ)おもはず小(こ)首(び)を傾(かたむ)けぬ、懐(ふところ)中(ちゆう)を探(たず)ねれば半(はん)圓(げん)の青(あお)紙(し)幣(ぺい)一枚(まい)と銀(ぎん)銅(どう)とりまぜて、僅(わず)かに三十(さんじゅう)餘(よ)銭(せん)、

陸(か)の續(つづ)かむかぎりは山(やま)も川(かは)も目(め)に入(い)らねど、うち寄(よ)する浪(なみ)の上(うへ)には船(ふね)なくて何(なん)とせむ、さりとして懐(ふところ)中(ちゆう)の半(なか)を割(き)いて一(いち)夜(や)の航(かう)路(ろ)に捨(す)てむ事(こと)、そもく今(いま)の身(み)に過(く)分の(ぶん)儲(せ)上(じやう)かつは残(のこ)る半(なか)をもて知らぬ他(た)國(こく)の空(そら)いよく、覺(おぼ)束(つか)なく、よし一(いち)錢(せん)半(はん)交(かん)たりとも後(のち)の扶(たす)けにせばやと濱(はま)邊(べ)を駈(か)け廻(めぐ)って、商(しょう)船(せん)の便(びん)を求(もと)めれば、幸(さい)ひ四十(しじゅう)石(こく)の米(こめ)と味噌(みそ)を積(つ)んで三(さん)津(つ)濱(はま)に歸(かへ)る船(ふね)あり、航(あ)價(ひ)は汽(き)船(せん)の三(さん)分(ぶん)の一(いち)なりといふ。

かはりもの

汽笛一聲、一抹の煤煙を残して夢を乗せ行く海上の賜物ありながら、明治二十一年の今日、わざ／＼風を便りの板子一枚に乗りて、さながら甕に似たる沖の眞帆片帆、まして一夜の航路を早くて三日の揖枕、あゝ錢なきは脚なきに等しと思へども、さて急がぬ旅に的もなき心の雲、ゆる／＼日本一の瀬戸内を横ぎりて錢ある奴の知らぬ景色を見てくれむと、浪路はるかの磯邊に豆の如き肩を怒らして、我ひとり慰めし當時の容體、後に思へば却つて哀れなりける、をりしも五月二十六日、ふりつゞきし五月雨の空やう／＼霽れて夕陽に彩る海の景色ほつと薄紅をかけたる如く、遠山寺の鐘の音うしろに響いて、見渡す前には磯邊を歸り來る鉄乃など、さながら物の本に讀みしを其まゝ今こゝに見る心地して、旅に馴れたる天涯浮浪の身にも何とやらむ故郷なつかしく、うら

やましくも返る浪かなと昔男の哀れまで思ひやりつゝ、我を忘れて佇む折しも、いざや出船の準備とゝのひしとて立騒ぐ水主に促され渡せる掛板を傳うて胴の間に入れば、わづかに二坪ありやなしやの船底に薄縁といへる席を敷き詰めて坐すれども頭を打たるゝばかりの低き船天井、左右は弓形の張板、前と後は艫と艫の揚引戸、罪なくて捕はれし檻に等しき便船の客を見れば、男女うちませで八人車坐の中に、里は知らず海上は五月といへど夜の寒さの堪へ難しとて船頭の情に据ゑし土炬燵を取圍みつゝ、これも浮世の汐に引かれ心の浪に漂ふ我等が友と思ひの外、土音なまりの聲高く互に興じて笑ひさゞめく風情、さては遠き旅にもあらで近き浦邊の人なるべしと、おもへば我のみいと淋しき心地して、をりしも夕暮の顔さへ臙に見分けがたきを僥倖、そのまゝ片隅に肱を曲

かはりもの

けて手鞠の如く身を縮めつゝ伏し轉びぬ。

船は三百石たらずの商船なれど、積荷うすければ水脚かるく、船頭一人に水主と炊飯を合せて三人、筈と葺き横神しめて纜を解きし後は、いざや港をあとに今ぞ出船の聲もろとも、やうく六七反と覺しき蟬の啼く音、追風に帆をかけた夕潮わけゆく浪の音を板一枚隔てし耳朶に聴きながら、友もなき轉び寢の終夜、ましてや八人の同舟いづれも馴れて舳の聲のみ高き中に、我ひとり睡りもやらず越方行末の事など思つて萬感うたゝ胸に湧けば、五月闇の汐風いつしか舟張の隙間より襲ひ來て肌寒し。

終夜の浪の音、さては風の音、たゞ我身一つを弄ばるゝ心地して寢られぬまゝの曉を待つ苦しさに、まのあたりの題を探つて好める吟詠の腹稿を起せば、人

かはりもの

生字を知る憂患の基といへど文字あるものゝ憂を掃ふ一興また此時にありと、机上百日の工夫に勝る客舟一夜の情致、誰か知らむと獨り慰むる折しも、やれ今日の天氣は日本晴、東の白みに雲がないぞと叫ぶは正しく船頭が表に立って見渡す聲、さてこそ夜は明けたれど待ち兼ねし我は一入さらに嬉しく、いつしか心ゆるみて身に疲勞を増しけむ、そのまゝ今更に却つて一睡の夢を結びぬ、客人々と機度か呼ばれて夢おどろけば、はや今日の旭は胴の間の上板より射し入りて、炊飯が持ち運ぶ朝食の飯櫃を取り圍みつゝ、同舟の人々おのゝく箸を取つて先を争ふ風情、等しく我を見返りて會釋しながら、昨日の乗込みなれど夕暮の薄闇に今日あらためての挨拶ぶり、いちくその顔を見渡せば、いづれも濱風に吹かれ抜いたる男女とりまぜて。老いたるは年の頃五十あまり若き

かはりもの

は十六七の少女なれど、これとて女といふ外に何の色香もなき浦濱生育、しかも男五人の中に四人まで昔のまゝの頭髪を結んで、どこやら汐垂れたる衣服の端々、たしかに此船の立寄る島影ならずば中國四國の濱邊に住むものゝ汽船を捨てゝの渡海も其筈なりけりと思ふ中に、たゞ一人の訝かしきは二十四五の書生、置所なきにや茶色のメリケン帽を阿彌陀にかついで色さめし雙子織の袷に襟垢しみたる白地の浴衣を重ね、腰に纏へる木綿の兵兒帯も嚙や幾年の餘波、紺足袋の指先食み出でて草鞋の紐摺あり〜と残るは、あはれ我と同じく今の世に人車を知らぬ山河の旅路、脚絆は解いて傍の小さき行李に載せつゝ黙然として舟板に背を持たせ兩腕拱いて物おもふ體、肉は瘦せたれど骨格たくましく色は黒けれど目鼻に自然の愛敬を浮べて、太く濃き一文字の眉毛、厚く柔かき

かはりのも

大の耳朶、一見さらに邪氣なき温雅の男振ながら、への字なりに唇端を固く結び兩の顴骨の削れる如く俄に落ちたるを、もし浮世の苦勞に窶れし果ならずば何とやらむ天性の險しきを見るべく、しかも我に對ひて會釋せる時その帽を脱ぎし五分刈の額際に、赤みかゝりし一寸ばかりの古疵いと目立ちて、あたらし山の端の月に村雲かゝりし思ひをなしぬ。彼も書生、我も書生、いまだ親しく手を取つて語らねども同じく世に後れたる同舟の思ひ、ともに憂き旅の空を渡りし相互の風情、中間を隔つる七人の男女がうち狂うて頻りに喚く文盲の愚言きゝながら、おもはず我も笑へば彼また笑を浮べ、我うまれての無口なれど彼も生來の無口にや、慰めて問ひもし問はれもしたき心の希望あり〜と目元に現はれ、幾度か物言むとする唇端うごきな

かはりもの

がらも、眼前の騒がしさに打消されて言葉を交す機を得ず、そのまゝ其日の晝
 すぐる頃となれば、横島黒島の間潮に乗切つたぞ龜が首は其所にと叫ぶ船頭
 の聲に、七人の中の男女三人、さらばさらばと拵のこして胴の間を立出でし
 ほどもなく船は倉橋島の何とやらいふ浦邊に著きぬ。

今の三人さては倉橋島の者かと、我もつゞいて横神に立出でつゝ見渡せば、八
 重の潮路の浪しづかに、はや夏霞ひく空の薄模様、音にきく龜が首の岬を右手
 にめぐりて左手に綾どる豊島下島、さては梶取島より押し戻す潮を展きつゝ、
 目も遙なる沖の怒和島、井島を縫うて漕ぎ行く眞帆片帆、これもいづこの港に
 急ぐやらむ我と同じき人や乗せけむと、さながら描ける如き大海原の景色に心
 も伸びず氣も張らで、たゞ果敢なき事を思ひやる身の恥づかしく、やがて胴の

間に立歸りて見れば、俄に三人の味方を失うて、やゝ靜肅なる四人の背後に、
 かの書生うとくとと睡りぬ。

其二

二十七日の其日も傾いて夕潮に暮るゝころより、定めなき五月の空の癖とて俄
 に打ち曇り風さへ強く吹きしかば、ある島影に船を寄せて終夜笛うつ雨の音を
 きゝしが、あくる二十八日は思ひの外なる東天に晴れ渡る今日こそと、船頭水
 主もろともに勢ひ込んで追風に帆を孕ませつゝ睦月島の浦まで漕ぎ付くれば、
 残りし四人またこゝより陸に上りて、三津濱へ行くものは果して我と彼の書生
 の二人とぞなりぬ、さればこそ今の世に島人ならでは誰とて斯る商船に乗るも

かはりもの

のかは浮世しらすの浦生育、おもへば羨ましきほど騒ぎたてし七人の男女いづれも去りて、睦月島を漕ぎ放れつゝ伊豫の小富士の興居島に近づき、三津濱へは遅くて今日一日の海上と聞くは唯二人、狭かりし胴の間も今は俄に廣き心地して、ゆるやかに身を寛けながら差對うて我まづ口を開きぬ。

「つい御挨拶をする機がなくて、長らくの間どうも失禮いたしました。乗込みの多い汽船なら知らぬこと、こんな小さい鼻の突き合ふ中で二日二夜も御同船しながら、しかし、こゝに固まつて居た一團は随分やかましい人達で困りましたな。」

いひつゝ我を忘れて膝すり寄すれば、かの書生も待ち兼ねし笑を浮べて慇懃に頭を下けながら、

「いや拙者よりも今に御言葉を掛けよう、掛けようと思ひながら、御同様の人達に遮られて、ははゝゝゝ、世間見すの島人は實に氣樂ですよ、あれで生涯を送るんですから、時に貴方は何處へ、三津濱ですか松山へ御越ですか」
空ふく風もろとも東西南北に浮浪の身、かく問はれては直ちに返さむ言葉もなし、

「なアに何所といふ的もない風來坊です、實は廣島へ人を尋ねて行きましたが生憎其人は熊本へ立った跡で諺にいふ頼む樹の下に雨漏りし境涯、目的は外れるし歸る旅費はなし立往生の破れかぶれ、四國路へでも渡つて見ようと、幸ひの便船で先づ三津濱へ着く心算ですが、さて乞食になるか何になるか、闇雲ぱつたりの行付け次第ですからどこで難儀するも同じ事だと覺悟しながら、するぶ

かはりもの

ん心細いこつてすよ、始めて知らぬ他國では』

語り終つて勇氣一番はくと笑へば、今更しみるゝ我顔を見詰めて、さても無謀の男よと驚ける體。

「それは御當惑でしたな、拙者も身に覺悟ありますが百里の山河はるゝ人を尋ねて往つた甲斐もなく其人が他國へ立つた跡などは實に落膽の至極で、しかし、かうして御渡海なさる以上は、まさか丸で御心當りのない事も御坐いますまい、伊豫に聊かでも、少しは何か」

「いや全く無いです、無いも無い、殆ど闇中に磔を打つが如き様有で」

「ちやア何です、立入つて甚だ失敬な御尋ねですが、まづ三津濱へ著いて其後どうなさる御心算です」

かはりもの

「そこが即ち風來坊たるの所以で、ちと大層ですが、骨を野末に曝さざるを以て重疊と致します、だから其餘の艱苦は飴を甜るが如き勢ひで、しかし馬鹿な奴だ、何のために自ら、好んで其難を求むるかと同はれちやア少々こまりますな轆轤不遇の志士が俗世の醜を憤つて山水の靈に腸を洗ふ、そんな氣のきいた人間でも御坐いせんから、いはば無鐵砲の青二才が駈け出しついでに脚が止まらないで、たゞ飄然と斯の通り汐風に吹かれ行くとても御答へいたしませうはゝゝゝゝまるで木の葉のやうなもので、宙に舞うて居る間は聊か妙ですがさて落ちた時は其まゝの十塗れ、かたアないでせうよ」

口にまかせて會釋もなく喋々と囁れば、いよく眉を擡めて我を怪しむ風情たゞ苦笑ひして腕を組ぬ、此ごろの風邪にや冒されけむ、袂より反古紙を取出し

かはりもの

て鼻うちかみながら、またもや我を見返りて言葉しづかに

「なるほど、それくらゐ御壯の勢ぢやア、到るところ、別に御心配もありませんまいが、四國路は御承知の通り本土と離れて、いくら大きくても高が島國ですから、なか／＼まだ案外に開けませんよ、俗に四國まると稱へてさすが、大師出身の餘徳で自然に人氣が憐哀深い、いや珠數さへ手首に掛けりやア赤裸で渡れるのと言ひますが、それは或一部の例で、わけて伊豫などは思ひの外に氣の暴い情の薄い土地です、第一が貴方、十九世紀の今日いまだ汽車といふものを煮て喰ふか焼いて喰ふか知らない土地ですもの、よほど能く御用心なさらないと、書生風の通じない國ですよ、ましてステッキ一本の、的もない旅行では、しかし、かういふ拙者も實は伊豫の生産で、まる七年ぶりの歸國に御覽の

如き落魄、飾る錦繡は口でのみ言つても身は茲に襤褸の結果、とかく世の中は宿志の十分一も難いですなア」

餘所ながらの情に我の無謀を諫めむとして、いつしか其身の胸に蟠る歎聲を漏らしつゝ、おもはず差俯かむとせし頭をおろしもやらず、

「はゝア伊豫ですか、久しぶりの御歸郷ですな、失禮ながら伊豫は何所」

「伊豫は風早郡の菊間と北條の間で、ちやうど此船の著く三津濱から東北かの今治からア西南に當る街道傍の田舎村で、八年前に家を飛び出して久しく東京に居りましたが、天生の魯鈍、いたづらに功もない苦勞ばかりを重ねて、とるだけの年齢を無事に取つた身體一つで歸る境涯です、しかし貴方の御生國は、やはり東京に居られたやうですな。」

かはりもの

かはりもの

「はいうまれは畿内の者ですが、お察し通り幼少から東京へ出まして御同然に敗軍の將、いや雑兵ぐらゐるで」

「はゝゝゝゝだが人間いくたびか遣り損はないと萬事の美味が出ませんからね」

「左様まアさうでも思ツて氣を取直しますのさ、あはゝゝゝゝ」

かくて船は小富士ときゝしころ、夕陽いつしか黄金の浪を碎いて、ほどなく三津濱へ著きぬれば、曇れる間に星の影さへ薄く、興居島の漁火かすかに沖を揺めいて、港に泊る大船小船の友よびかはす汐鏑聲、岸を傳うて立ち竝ぶ入江つゞきの軒には燈火ちら／＼と濱風に吹かれて、新地あたりの里の三味の音たえ／＼に聞ゆるも土地から一入の哀れを添へつゝ、秋ならねども轉た孤客の腸

を断ちぬ

まして脚下の東西さへ分ち得ぬ身には、よせくる浪の音に陸を知れども、鼻頭の間に迷うて思はず佇む我を、かの書生ふりかへりて袖を曳きつゝ、此方へ來給へ、かりにも同舟の情義、きけば互に隔てぬ境涯、たとひ鬼たりとも此まゝ此所に君を捨て去るべきやとその聲は正しく當時の神なりけり、佛なりけり、

其三

かねての覺悟とはいへ、しらぬ他國の間に打揚けられて、磯うつ汐と風とに終夜彷徨ふべき身を、幸ひ此濱に昔馴染の家ありとて彼の書生が情に伴はれ、やすやすと一夜の手足を伸せし嬉しさに一入の意を手明けて、枕を竝べながら互

かはりもの

の身の越方行末の事など語り合へば、いよく我も懐かしく、ますく我も捨て難き風情、諺にいふ意氣相投すれば途上に蓋を傾くる刎頸の交情とかや、こゝに始めて此の書生が來歴を知りぬ、

書生の性は岩下、名は佐吉、この溜つゞきな片山里の農家に生れて、鋤と共に朽ち果つべき身を幼少より人に勝れ土地に稀なるものと囃されて、世に學問といふものゝ味を覚えしは今を去ること八年以前、仰いで青雲を凌ぐ十六の春、許さぬ父母へ一片の書置を止めて家は其まゝ弟妹に譲り給へ我はこれより瓢浪の一寒生、誰も云ふ事ながら、宿志もし成らずんば再び閩門の橋を渡らじと、いたづらに廣言吐いて海を渡り、備後の尾道に一人の伯父を尋ねて僅少の旅費を纏ひ、はるく東京に上りて苦學七年、それさへ半は眼前の衣食に追は

れて他人の一日を我半日に數へしかば、さらぬも抄取らぬ人生に際おくれ、こゝに二十三歳の男子やうく或法學校の半途に至りしのみ、せめては此の一段落を終へての後と覺悟の折しも、此ごろ父よりの書通に我も甚く老いたり汝が其後の姿も見たし、たとへ再び出づるとも老少不定、あはれ今のうちにたゞび歸國せよと頻に促されては、流石に故園なつかしく、天涯の孤客さらに父子久離の情に引かれて歸る空にも、かたぐ母の我ために繼母の笑顔を見むとて辛酸數年の書を賣り衣を剥いで茲に二十五圓、おして知り給へ、その餘は如何にして三百里の旅を凌ぎしか。都門の風塵七歳の書生、いまだ汽車も知らずと、何とやらむ額に残る古疵を撫でつゝ涙を含んで語りいだしぬ。

かはりもの

其四

交はりは時の長短をもて論ぜず、友は事の難易に依つて移らず、互に一夜を語り明して後の情誼、いよく捨て難く放れ難き心地して、今更ら七年の苦學を片山里に埋めん身ならねば、やがて老いたる父を慰めて再び上京すべき彼、四國路は元來、青年有爲の脚を止めて甲斐なしと飽まで諫められし我さらば、諸共に手を携へて東京に上らむと、こゝに誓を固めて約を結べば、彼また我意を俄に翻せしを氣の毒とや思ひけむ、しきりに笑を含んでいふ、近く三里に松山の城市あり、越えて一里の奥に道後の温泉あり、山は高からねど音に聞えし眼前の興居島、これを伊豫の小富士と稱して國中名山の第一に數へ、其他の山水城市さらに君が旅情をひくに足らねば、せめて此三景をもて他日の記念に残し給へ、近うちきに東上の首途を枉けて親しく伴ふべしといひぬ。

其五

いざや諸共に東上の約を固めし上は、いたづらに無益の地を駆け巡つて詮なき脚を痛めむより、幸ひ我故郷に暫時の假寢して旅の疲勞を慰め給へ、父を慰め母に乞うて再び家を出でむこと必ず五日のうちにとありと、いふまゝの彼が情誼に誘はれて三津濱を立出でしは二十九日の晝やゝ過ぎて、晴れ渡る究に身も軽く、浪うち寄する岩根づたひの崖道に草鞋ふみしめて打ち語りつゝ、堀江を過ぎ久保を越え、きゝおよぶ北條は此地かとはかり霞寶かけたる影に立寄りて遊

かはりもの

かはりもの

茶に咽喉を濕ほし、またもや瀧邊の街道を半里あまり、をりしも夕陽に下き風早浦を見返りながら、右に折れて高繩山の裾に入りしころは、はや暮れて宵闇の一むら茂りし森の此方、二つ三つ四つ窓より漏るゝ燈火を指さして、あれこそ此身の生れし村よと聞きし時、おもはず彼が歡喜を汲んで他郷の我さへ涙を浮べぬ、

雲間を漏るゝ星の餘光に確と見えねど、村端れに結びし笹垣の奥ふかく幾年の蕨葺屋根きはだちて闇より黒き屋後には、這ひ互る山つゞきに自然の岩組を負ひつつ右に聳ゆる松の林には月さす夜半の葉越や嘸と思はれ、軒場に添うたる刎釣瓶の立木に宿鴉の夕暮までも偲ばれて、破れし竹の横窓より幽に漏るゝ燈火の風情、遠き藪越に去歲の麥ひく臼の音、ちかく此方の小屋に手飼の牛の啼

く聲など、見るもの聞くもの浮世の塵埃を放れて、けに安けき片山里の一軒、こゝを生れし彼が家とは、たとへ事敗れて學を廢するとも、餘生また天の賜物ありとぞ羨みぬ。

君よ其所に暫し待ち給へ、我家ながらも國を去つて七年の今宵と、門の引戸に手をかけつゝ家内を差覗き、やがて其まゝ身を入れて何をか聲高に物いひしが、忽ち一人の少年さつと蝗の如く飛び出で、闇の彼方に走せ去るや否や、首さし出して我を呼び入れぬ、

入りて見れば、固より片田舎の農家とて、庭に築き上げた土竈に夕炊の残んの煙たちつゞき、今は用なき藁束を麥から棹に支へて山の如く積みし此方に、鶏籠などを置き伏せて春に蔽ひ、生命と契る鋤蹶を無造作に寄せ掛けたる様い

かはりもの

かはりもの

かにも長閑けく、席上には表の窓に對うて織かけし機の下、まだ掃き出さぬ糸屑の通おのづから納戸に傳ふて、煤ほけたる行燈の火影ちろちろと破障子より吹き入る夜風に揺めいたり。

「さアどうか草鞋を脱いで此方へ、御覽の通り山百姓の古家ですから、萬事不便で行届きませんが、野宿するよりやア宜いと思つていたゞくさ、生憎父は據ない用で今治在まで、事によると今夜ア泊るかも知れんと言ひましたが、母は近處へ夜談話に往つたさうで、いま呼びに遣つたのは愚弟です、しばらく見ないうち馬鹿に大きくなるもので、ちやうど拙者が國を駆け出したと同年、しかし身體ばかり大きうても、こんな山家に育つちやア挨拶ひとつ、ろくに出来ないです、門外に貴方が立つてると教へたに聲をかけず飛び出た様、實に野生です

よ

いひつゝ見廻して、庭の片隅より鹽を持ち来り、釜の蓋とつて幸ひの温湯に互の足を洗へば、いざとて、納戸の此方なる燼の邊へ我を誘うて、突き立てたる長き竹箆に埋火を掻き起しながら、自在鍵を引卸して傍の大茶瓶をかけたる用意周到、さすがに往時わすれぬ手際と笑へば、彼も笑うて、

「はゝゝゝゝゝいくら考へても、他家の勝手は分りませんが、まる七年ぶりに一目ちよいと斯う見ても、自分の生れた家は狼狽かないもので、妙ですなア」
 「しかし、そこが即ち故郷ですよ、どうしても人間望郷の念は別なもので、拙者なども幼少の時に國を出ましたが、目を閉ぢりやア直ぐに家中の様子が残らず見えますからね、嘘を言やア今ごろ誰は斯うして居る彼は何をして居る。背

かはりもの

かはりもの

戸の柿の木に今年の實が幾個なつて其味がどうだと、おもはず口に水の湧くこともありませんもの』

『いや御道理實に全くですよ』

をりしも戸外の闇に私語きながらの足音は、飛び出せし弟が母を呼び迎へて歸りしならむ、ぬツと入り來りて暫し物をもいはず庭に立つたる顔を我まづ燈火の光りに見れば、年のころ四十七八、よしや朝夕の野山に早く老けたりとするも、なほ五十路の坂には三歳四歳を餘せる半婆、身に手織綿の古袷を裾みじかに足踏み出して、何かは知らず男帯より巾の狭きを腰低に纏ひ、頭髮は艶もなく名もなき結びやう、胸襟ひろげ打ち開けたる中より皺枯れし乳房を覗かせつゝ、窪める眼ぎらくと奥に光らせて横一文字の大口かみしめ、鼻柱の上に弛

める額の皮を寄せたる風情。この母にして其弟ありと見ゆれど、こゝに坐せる我友の兄には更に似ざるも道理、かねて繼母とぞ聞きぬ、

『佐吉や、おぬし宜う戻つて來やツたの、うみの父さん不在で本意なからう、そこに御坐らツしやるのは』

いひつゝ、なほ庭に立ツて笑を含まず此方を見詰めし面體、あはれ七年ぶりに家の嫡子が歸りしといふ景色もなし、

彼は直ちに庭に飛び下りながら、慇懃に頭を下けて其手を吸はむばかりの扱ひ

『まづ御上り下さい、さアどうか、そいぢやア挨拶も出來ませんから。これ母様の數物はないのか、あるなら其所へ』

殊更に繼母の顔色を避けて、これも異母弟ながら父の子を促せば、やうく草

かはりもの

かはりもの

履脱ぎ捨て、這ひ上りながら、わざと燼の邊へは近寄らで我を尻目にかけてしま
 機織場の此方なる燈火に背いて無言の體を、いかにも慰め顔なる彼は頻りに
 言葉を和らけつゝ、

「えゝ、實に何とも申譯のない事で、七年以來いろいろの御心配かけました謝
 罪は、いづれ後刻、まづ差當つて相變らず御機嫌よろしう、つきまして、あの
 方は、豚私が東京で年來の世話になつた恩人、このたび松山へ來られる用があ
 つて幸ひの伴侶、同道して下さりましたから、恐れ入りますがどうか、御禮を
 申し上げて下さいますやう、時に貴方、これは拙者の母で御坐います」
 夏ならぬ額の汗を拭ひながら、言葉さへ絶え絶えの苦しげに引合はすと、見る
 に見兼ねし我まづ膝を進めて辭儀を演ぶれば、さすがの不興婆も漸く此方を拂

り向いて、

「佐吉めが、いかい世話になりましたけな、したが幼少い時から曲つた横摺者、
 さぞ迷惑ばかり掛けをツたことで、なアもし、またこゝは山家で馳走も叶は
 ン處へ、よう御坐らつしたよ、一時も早う寢まして旅の疲勞を、こりや佐吉よ、
 奥の室でお父様の蒲團かぶせてあけろ」

きくより彼は直ちに起つて我手を取り、ほつと溜息つきながら納戸の奥へ誘ひ
 つゝ、夜具とりのべて我耳に私語きぬ

「なんと言つても七年ぶりの歸國、まさかと思ひましたが、やはり昔のまゝで
 實に面日次第もない、どうか今夜だけ堪忍して下さい、父が、あす父が歸つた
 ら、かうでも御坐いませんから、今夜中」

かはりもの

かはりもの

いふ顔を見れば兩眼に涙みちたり、

諺にいふ針の筵とは此事なるべし、世にいふ繼母根性とは實にあの婆なるべし、たとひ初めは其意に反いて出奔せしにもせよ、竟に家を興し名をなすは孝の第一として、七年の苦學難行、半途ながらも懐かしき父の命によりて、三百里の山河はるく、と歸り來しものを、かりにも其母として斯る冷遇のなるべきや、昨夜三津濱に我と枕を並べて語りし時、あゝ都門數年の難苦に得たる書を賣り衣を剥いで茲に二十五圓といひし彼が心、あはれ今更に思へば、それさへ含笑ひとつを求め得で、草鞋の紐を解くや否や物凄き目に睨まれて、浮世に押しも押されもせざる二十四の大の男、まづ小兒の如くに涙ぐみし風情、かつは我に對うて苦しげに私語きし今の一言、さてもく、無殘の家に宿りしものかな、せ

めて我なくば彼が心の少しは安かるべきに、悲しく淺ましく此さまを他人の我に見せもし聞かせもする痛はしさよ、さりとして我このまゝに今より立去らば、彼いよく、口を裂いて口惜しからべく、あすは父が歸らむと我耳朶に聳ふるはせしを思へば、父なる人こそ實に彼が親なるべしと、餘所の我さへ俄に其父の顔みたく、彼は猶更ら如何に見たかるべき、そもや今宵に引替へて互に手を取る明日の父子は、目より滾るゝ涙は同じ涙なれども、

其六

山陽道の雨にうたれ風に吹かれて、また三日三夜の浪に揺られ汐に驚かされし身の疲勞も、破れ障子一重の外に斯る悲哀を見捨て、睡らるべきや、固く目を

かはりもの

かはりもの

閉ぢ耳を塞ぎつゝ、夜具ひきかづいて頭を埋むれども、ありありと目に浮ぶ鬼女の面、なんとやらむ耳に立つ彼が泣音、さながら總身を刺さるゝ心地して堪へ難ければ、またもや被れる夜具そつと跳ね退けて思ふやう、たとひ我こゝに斯く聞かじとすれど、現在かしこに苦しむ彼が悲哀を減すべきにもあらず、さらば勇を鼓して残る方なく今宵の始終を聞き取り、せめて餘所ながら父なる人に告げ知らせむ、彼が孝心かならず打明けては得言はじと、枕を敬てゝ耳を傾くれば、おもひきや最とゞ静寂なり、さても訝しと我を忘つて身を起しつゝ幸ひ此方に燈火のなき障子の隙間より窺へば、いつしか繼母の姿なく、弟の影もなく、彼たゞ一人、黙然として爐の邊に頭を垂れぬ、さては飽まで曲りし繼母根性に、聞くべき事も聞く耳持たず言ふべき事も語る

唇筋うるさしと、彼を其まゝ置去にして自己が生みの子を引連れ、またもや近き家に夜話の詭訴かたゞ出で行きしなるべし、その心や憎く、その振舞や憎く、いかなれば何が面白さに斯くも無慈悲ぞ、あの鬼とても他人に對ふて笑顔を見する事はあるべきにと思へども、結局こゝに其影なくて無事なるこそ安けれ、やがて夜が明けなば父なる人も歸り來まさむ、かつは今この間に這ひ出でて彼が心を慰めむ言葉もあれど、なまなか我の睡らで歎くを知らば彼ますます苦しがるべしと、なほ片心にかゝりながら枕につけば、さしも勞れけむ、いつしか我を忘れて寢入りぬ、

幾日の旅の勞れし身にも、片山里の夜更けし習慣とて屋後の森に吹き騒ぐ風の音、ふと耳に入りて假寢の夢おどろけば、あはれ又もや聞ゆる障子の外に喚く

かはりもの

聲、さすがに我を憚りて潜めながらも手に取る如し、さては持ち兼ねし父なる人にもあらで待たぬ鬼女が歸りしかと、轟く胸を押し静めて枕を搥れば、火影にうつる邪慳の横顔いよく凄し、

「こりや佐吉、親を親とも思はいでな、ようもく振り捨てゝ出た此家へ、どの足の面さけて戻つて來をツたぞい、我腹をいふは異なが弟を見やい、村中の名物ぢや、照つても降つても朝から夕まで野山に稼いで一人前の孝行しをるに、おのれが飛び出たは恰と同年で、二十四の今日まで、さア何と思つて見限つた、いや見限らいでか、繼母の家に二度かへらぬと思ひをツたに相違ない筈そでなうて、七年の間、こりや手紙一本かく手はないか、書いても讀めぬ母と見下けをツてか、それも宜いとして佐吉、歸るなりや先づ村の誰彼に頼んでか

ら、謝罪て戻るが道ぢやによ、その仔細らしい小癩で我が家といはぬばかりの宵の面、その上に恩人か金神か知れもセンあの和郎を引連れてよ、ありや馬の骨か牛の骨かい、どこの街道で拾うて來をツた、長年の間を放蕩かわいた友達でがな、こころよしの父様はな、おのれの術に乗つて喜びもせうが、この母は食べぬぞよ』

しばし聲やんで手刻みの煙草を吸ふ氣配、彼が物も得言はで男泣きの忍び音、やがてまた喚くを聞けば猶更に辛し、

「これよ、その額の疵を忘れたか、おのれの強情骨を矯さうために、さらでも繼母といはれるを承知でな、身のために附けてやツたを思とも思はないで、いつでも逆様の仇に取りやこそ此母を踏付にしをる、これ、よう思つて見やい、

かはりもの

此家は誰が活動で持つ家ぢや、おのれが牛母と父様の時分はな、甲斐性なしの寄合で、うら山の築田が四五反の外に麥一合もなかつたを、村で十本の指數にしたは我が來てからのこと、父様も私には口のきけない中で、見限つて出た七年ぶりの汝がよ、あけるなりや口あいて見やい、相應の拵摺人あつてもな、萬事あらためた上で入れぬか入れるか思案物の汝ぢやに、素性もない他人の和郎か、第一に夜が明けたりや、あの和郎たゞき出せ、ついでに汝も出て人を頼んで來よ、どれほど父様が頑張つても、この母が承知ない以上、こゝを家と思ひをるな』

あはれ心を込めし彼が二十五圓の這ひ出でむ寸隙もなし、

其七

一番鶏のうたふ程なく明鴉啼き渡りて、東天の白みかかりしころ、隔ての破れ障子しづかに引あけて首を差入れしは彼なり、はや衣類を身に著け夜具を疊んで坐せる我姿を見るや否や、這ひ寄り來つて差俯きながら聲をふるはし、定めて聞き給はむ前夜の仔細、もはや片時も君を置くに忍びずといふ、その言葉も待たず我より膝を進めて眼を見張りつゝ、固より覺悟の前されど我のみかは諸共に君も出で給へ、君もし我を置くに忍びずといはゞ我また君を置いて去るに忍びずと袖を引いて家外を指させば、彼いよく、齒を噛み占めて首背きながら雨戸を引開け、そのまゝ草鞋もつけず背戸の裏口より立出でしを、あの鬼女が何

かはりもの

かはりもの

と思ひしやらむ、さては弟なるもの今年十六と聞くに、おのれが生みし母を諫めて斯兄を追ひ来る脚はなかりしや、引止むる手はなかりしや、背戸を立出で屋後の山裾に添うて、竹藪の細道を無言の歩み半町ばかり、をりしも彼は两眼に漲る涙を袖に掩ひつゝ、我を見返りていふ、

「お察し下さい」

たゞこの一言に總身の力を込めぬ、しかも唯この一言に、人間無量の悲哀を含めば、我も目に持つ涙の露を拂うて、

「實に、實に何とも申し上げやうがないのです、しかし此上は今治在とやらへ行かれた尊父の許へ、分つて居りますか御在所は」

「大抵わかッて居ります、父の従弟に當る親戚、必ず其家だらうと思ひますが、

念のため村の者に聞いて見ませう」

いひつゝ懐中を探つて胴巻より取出したる例の二十五圓、その中の十圓を我手に押附けながら、

「甚だ失敬ですが、こゝでお別れ申しますから、どうか三津濱でお待ち下さい過日の宿で、今治は僅五里ですから、すぐ此まゝの脚で行つて、明日か明後日おそくも三日のうちには御一所に、ついては今更悔むも愚痴ですが、さて段々と恥づかしい事を御目にかきました、これは實に少々ながら何かの御用意に、もはや不用の金ですから」

「いや、とんでもない、たとひ飢餓に迫るとも其二十五圓のうちは決して、また拙者も聊か持つて居ますから、ひらに、ひらに、それを受けるくらゐなら、折

かはりもの

かほりもの
角の御交際ながら断然ちはや再會いたしますまい、無効です、いくら仰しやツても」

「ちやア諄く言ひますまい、萬事は三津濱で」

「必ず待つて居りますから、どうか何事も御無事に、お目にはかゝりませんが尊父へも宜しう」

我は教へられたる街道に向ひ、彼は其まゝの山裾を傳うて互に見返りながら會釋いくたび、たゞ一時の分袖なれども、何とやら懐かしく悲哀も深い、

其八

そのまゝ分れて我は又もや三津濱へ立歸り、彼と一夜を語り明かせし宿に身を

寄せて、昨日と過ぎ今日と暮しつゝ、なほ残る物の悲哀に胸くるしければ、出でて磯邊の景色を見むともせず枕によりて睡れども夢やすからで、ひたすら彼が訪ひ来る日を待ちながら、約せし三日も暮れ四日五日はや六日となれど、窓うつ風の音信もなし、

繼母の鬼々しきだけに眞實の父や一入さらに戀しくとも、あれほど固く約せし日取を斯くまで違ふ彼ならねば、せめて其よしを一枚の端書に言ひ越すべき筈と思へども、別れし時に彼が心當りといひし今治在の親戚を聞かざれば、我より書を寄せて問はむ術もなかつたただ中有に迷ふ心地して、七日八日と過ぎし九日の朝、一人の年老いたる男いそくと尋ね來りぬ、誰ぞと問へば彼が父なりける、

かほりもの

かはりもの

來べき彼が今に來らで、來まじき父の訪ひ來しを何故と問へば、父なる人も思はず眉を擧めていふ、さぞや君が待ち給はむとて今治より汽船に乗りしは昨日の晝、さらば遅くとも其夕暮は此家に著くべき我子に、言ひ残せし事ありて斯くは陸路を走せ來りしといふ、さても訝しや、

父なる人も我も始めて逢ひし辭儀を打忘れ、互に怪しみながら汽船問屋について聞けば、いはるゝ時間に今治へ立寄りし大阪商船會社の船は、正しく其日のうちに入港しかど、さる人の上陸りし目撃さらになしと聞くや否や、二人もろとも打驚いて濱邊に駆け行き、幸ひ船は大阪の川口より三津濱までの航路となほ港のうちに錨おろして泊れるを目指す敵と見ながら、端舟の櫓に浪の花うたせて漕ぎ付けつゝ船室を改め、船員に聞けども何の甲斐なし、

父なる人は宛から狂氣の如く田舎氣質の一徹に前後を失うて、おろくゝと老の涙に身を浮かせし様、見るに心は消ゆれど我これを勵まして船員に仔細うちあけ、今治の汽船問屋に電報をかけつゝ其港よりの乗組幾人ときけば二十七人、さらばとて當港に上陸の切符を數ふれば、南無三寶、たしかに二十六枚、あゝ一枚の人ひとり其間に失せて影もなし形もなし、

其九

我みづから浮世を果敢なき身を悲しんで海に投ぜしか、否、片山里の草叢より飛び出でて苦學七年の難行に卵の毛の撓みもなく、三百里を踏んで歸りくる途上、さらに心氣一點の勞れし顔色もなき彼、ましてや母はなくとも父ある孝子

かはりもの

かはりもの

の一念ねんなんとしてふ婦女子ふぢよしの愚ぐを學まなぶべき、されば此この頃ころの煩悶はんもん沈吟しんぎんいつしか誤あやツて脚あしを失しせしか、否いな、中國ちゆうごく渡航たかうの汽船きせんは船縁ふねべり淺く浪なみ近ちかしといへども、あれほどの繼母けいぼが邪慳じやくけんを忍しのんで一語ひとことも發はつせざりし慎重しんちゆうの彼かれ、まして前途ぜんず有爲いうゐの志こころざしを抱いだくもの、何なんとして俄にわかに兒童じどう走卒そうそつの笑わらひを取とるべき、

されば思おもふ、たゞ哀あはれの彼かれは憐あはれむべき彼かれが命いのちに終まりし外ほか、爾來じらいこゝに三十年ねんいまだ彼かれが死因しゐんを知らず、わづかに明治めいし二十一年ねん六月じゅうごつ八日やちの其日そのひをもて永ながく幽い魂こんを弔さとらふのみ、

今治いまはりより三津濱みつはまに渡わたるの海上かいじやう、津島つしま、御手洗みたらし、楫取かぢとり、齋島いづきじま、大井おほゐの濱はま、風早かぜはやの浦うら、睦月むつきの此方こなた、興居島きこじまの横よこ、由良ゆらの港みなとの汐尻しほじりかけて、凡おほそ目めに入いるものは悉ことごとく我日記わがにっし中の涙痕なみだなりけり。

いきて百年ねんの友ともいたづらに語かたるべきなく、天涯てんがいわづかに十日かの友ともうせて綿々めんめんたる恨うらみ堪たへ難がたし。

高繩山たかなしやまの麓ふもとに夜よるの風かぜ、なんと吹ふくらむ、風早浦かぜはやうらの浪なみに曉あかつきの汐しほ、いかに冴さえけむ、秋雨あきさめの霽はれ間に筆ふでを擱おいて泣なく、

かはりもの

金と運

かはりもの

其一

武士に金の必要なく、これを手に取るだに汚らはしきものとせし昔は、その武士に祖先傳來の食祿といふものあり、食はねど高楊枝とは胃袋に一種不可思議の作用ありしにあらす、實は瘦浪人の瘦我慢なり、草木も肥料なくては枯るゝ世の中に、生きて動く人間そも食はずに居らるべきや、

金銀財寶は心のまゝなりとて浮世の苦勞を知らざる大名も、その大名の家來には金銀財寶のまゝならぬ浮世を知りぬいて、日夜に苦勞する金奉行といふものあり、聞くなりなく徳川三百年間の天下太平に不斷の春を唄ひし大名高家も、人し

かはりもの

れぬ内證は常に御勝手許不如意といふ餘儀なき秋風に吹かれて、表面の行列に土下座さすべき素町人より借金のないものは無かりしとぞ、まして人事一切の無代價を許さぬ今日の社會、まはり遠き屁理窟と世間知らずの空論とを儲置いて只これ金なり、國家の第一義は財政にして、内治も外交も經濟より割り出され、戰爭も貧乏では出來ず、年々の議會も豫算の喧嘩なり、その國家の一分子たる個人、また金なくて満足に立たるべきや、彼奴そろく曲ッて來たといへば殆ど半分は用を爲さぬ人間なり、いよく倒れたといへば既に無効なり、何處の腐れ儒者ぞ、空も見えざる割長屋の路地裏より青表紙を廣げて清貧を貴しとする、清貧もし貴しとすれば、清富さらに貴ぶべし、

たゞ慇懃むらくは古今ともに富んで清きものなく、灰吹と金持とは溜るほど汚穢

かはりもの

し、
 社會の進歩に伴ふ人心の向上發展、能く集めて能く散すべき筈の今日、なほ猫糞の金に嘸り付いて放さぬ有財鬼の多きを奈何せむ、たま／＼慈善事業に名を出すものあれど十中の八九その一面は自己の廣告にして、一面は世間に對する申譯なり。

妻子を飢餓に泣かして清貧に誇る奴は不具學問の中毒者、もはや今日の社會に度し難き無用物なれど、あり餘る金を抱いて義理人情を知らぬ奴に義理人情を教ふれば心機一轉の效能、忽ち事實に現はれて、口ばかり達者で物の無い奴が小田原評議に眼を白黒するよりも、事の運び早く世の中に益あり、ぐづく叶せば捻ぢ伏せても社會公益のため出る奴に出さすべき道あり、たゞ

無一文の素寒貧、これは逆さまに吊り下けても鼻血の外、出るものなし、

其二

難産の子は病弱にして安産の子は健全なるが如く、ふしぎに金といふもの、これを儲ける時は易く損する時は難し、出来る奴は夢のやうに出来て、損する奴は一所懸命に心配して損す、つまり金と人とは智慧にあらず工夫にあらず時の運の巡り合せなり、ほかりと出喰はせば何でもなく取ツて押ふれど、一度もし行き違へば追へども縋れども、ぐる／＼、遁け廻ツて、なか／＼手に入るものでなし、

かはりもの

人は寝る眼も寝ずに働いて苦勞しながら損する中に、一年間その運と金に取り

かはりもの

付かれて樂々と三百萬の大金を株式界より抜き取りし冥加男あり、名は細川小助といへど、實は根性骨の太くて小さくない奴との評判、彼奴あのまゝ捨て置いて堪るものかと、四方八方より一時に包圍攻撃すればするほど、取られて細川ますます太くなり、小助いよく大助となりぬ、

一年で三百萬の上また、僅三月で生百萬の土持をした連中、もはや再び向ふ勇氣もなく、たゞ呆れて見物するのみ、せめて病氣でも出るかと思へば、五年以前より引き續いた胃病まで忘れたやうに、すっかり癒つたとの事、

當分あの様子では逆も叶はぬ、まア敵手になるなといへど、彼奴から敵手になつて來られては、猶更ら堪らぬぞと、果は兜を脱いで残念ながら軍門に降り、そろ／＼懷中に喰ひ入らむとするもの多し、

かはりもの

されど細川小助の用心堅固、家來も味方も入らず、どこまでも大將一騎打の客筋で、誰が説いても勸めても店を持たず城も陣も張らず、本所の龜澤町に十五圓の借屋住居、通ふ電車は固より毎朝の割引、晝飯は蕎麥の掛け二杯で済し、煙草は嫌ひ酒は飲まず菓子も食はず、衣服は絶えず木綿の筒袖、履物は三十錢以下の日和下駄、夏の炎天も頭に帽子を載せた事なく、冬の嚴寒も首に襟巻した事なく、四十五の今日まで白粉臭い女を振り向いた事なく、料理屋と待合とは無價になる時節が來るまで行くところでないとい吐して、めツかちの田舎女房一人に山出の飯炊婆一人、彼奴あの身代を誰に譲るかと思へど、無縁の他人が氣を揉んで心配するほど本人は淋しがらず、たゞ人の顔さへ見れば千萬圓千萬圓といふ、さては彼奴いよく千萬圓にする了簡、五六百萬圓まだ取られる奴

かはりもの

があるぞと株式界の大恐慌ベストよりも、身震ひして恐れぬ。

其三

午後四時過ぎ、鑑橋の橋詰より本所行の電車に飛び乗りし男は、獺の襟巻に顔を鼻まで埋め、薄鼠の中折帽子を眉毛の際まで下し、その間に金縁眼鏡を光らして色白の三十四五、ラクダのインバネスに二枚重ねの大島紬、無論、洋服の時は首の廻らぬハイカラーに赤いネクタイの當世風、おもはず横を向けば、その隣席には例の細川小助、人目には新舊の若旦那と土百姓との對照なれど、金といふ奴は無遠慮に團扇をあけて、この相撲は取組に及ばずとの勝負判然。

「や、細川さん、今お歸りですか、どうでしたか今日の場面は、實に凄い亂戦でしたな、しかし貴君ア別もんだ。お山の大将たゞ一人でじつと見下してさへ居りやア、自然に他人が運び込んで来るんですからなア」

「はゝゝゝ、いや、おかけさまで」

「おかけさまは酷い、もう少し何とか聞いて得心するやうな挨拶の仕合はなにもンですか、貴君は只おかけさまで済みますが、其おかけさまと絶えず運ぶ方になつて御覽なさい、堪りませんぜ、なかゝ容易なこつて済みませんぜ、我々も随分、ない中から底を叩いて御燈明ぐらる獻じて居りますよ、はゝゝゝ」

「お氣の毒ですなア、だが金は生物ですから長く一個所に居りませんよ、今に遁け出して貴君方へ、そろゝ御返済する時節もありますさ、當分まア大切に
お預り申して置きませう。

かはりもの

かはりもの

いち／＼吐す事が癩に觸れど、盗賊でもなく欺偽でもなく、互に承知の上取る奴と取られる奴、有る奴に對うて無い奴の頭は上らず、逆も真正面の太刀打では叶はぬ老爺ながら、一番その道具外れを横突きに突いてやらうとの内心、一時に細川サン、我々と違つて工面工夫といふ事の入らない貴君ですから、別段お歸宅になつても、氣樂に御用のない身體でせうな」

「はゝゝゝ、まさか、さうでもありませんが、工面や工夫はしても出来ない馬鹿ですから、一切そんな事はしませんね、たゞ茫然と、黙つて温順しくおかけさまを蒙るだけの藝です」

「さアその黙つて搔き寄せる藝が騒いで取られる奴のため、なほさら怖いんですよ、しかし別段これといふ御用が無けりやア、如何です、ちよいと、お附合

ひ下さいますか」

「どうへ」

「つい、そこです、濱町です、どうせ御歸宅の途ですもの、御夕飯かたく」
「濱町、夕飯、いや夕飯なら、宅へ歸つて食ひますよ」

「ところが細川さん、實はね、かういふ理由なんです、僅少ばかりですが先々月、或人から無理に頼まれて金を貸したところが、いくら催促しても返しません、しかし其奴の妾が濱町に待合をして居て、どうか遊んでくれるといふぢやありませんか、つまり狡猾い考案で、金の代りに高い飲食さして棒を引かせる了簡さ、いづれ損には極つてますから、みす／＼丸損も出来ませんや、三百圓ですだから尠くも半分ぐらゐる、食つて飲まうと思つてるんですよ、運の悪い

かはりもの

かはりもの

時は細川さん、さう廻ッても無効ですなア、はゝゝゝ」

「なるほど、そりやア飛ンでもない災難ですな、ちやア今日の夕飯だけ折角のこつたから、お助太刀しませうか、助太刀ですぜ」

「無論ですとも、たとひ捨て、置けない義理があつても、わざく出してまで奢れますかね、かう曲ツた時には、一人でも多く味方を連れ込んだ方が小氣味よくツツて溜飲を下けますよ。」

語りながら濱町の停留所より電車を降りて、所謂狭斜の巷に入り込めば、大小の中ぐらゐを占めし待合の門口、かういふ所へ足を向けしは細川小助、これが生れて三度目、なるほど、無價でなくば見向きもせぬ奴なり。

其四

萬々委細承知の女將が心得て、わざと藝妓も呼ばず酒を出さず、奥座敷で二人の差對ひ、されど料理は思ひ切つた山海の珍味

「細川さん、電車でお話した通りの理由ですからね、御遠慮なく、どし／＼召上ツて下さい、お土産の折も別に命じて置きましたよ」

「いや、御辭退すべき筈だが、さういふ理由なら遠慮なく戴きませう、なかなか美味い、美味しい道理さね、勿體ない、まるで金を嚙むんですからな」

知れた事を叫すぞ、晝飯の空腹を蕎麥の掛け二杯で済ます奴、これが美味くなうて何とする、

「ところが細川さん、年が年中お顔を見て居ながら、かう沈着いて貴君と、差對ひ合ツた事は最初ですから、幸ひ伺ひますが、どうして、貴君ア、さう自由

かはりもの

かはりもの

自在に金が儲かるんです、失禮ながら場の業に於ては、さのみ飛び放れて神様のやうにも思ひませんが、不思議ですな、近ごろ貴君に向つて生命の無事な奴アありますまい、というて貴君の遣る通りに随いて遣れば、すぐ反對に出られて入念に三度目の背負ひ投げ。もはや三度目に誰も根氣よく起きて續くものはありませぬよ、細川さん、御用心なさい、うかく闇の夜は一人で歩けませんぜ」

「はゝゝゝ、なアに今暫時ですよ、千萬金になりさへすりやア、それ以上、もう取らうとは思ひませぬからな」

「千萬圓、眞實ですかよく聞きますが貴君の千萬圓は、

「私は自分の思つてる事を秘すのは、相場の上だけです、どんな事でも誰にも明白に打ち明けますよ、他人は法螺でも私は法螺を吹く必要がない、實際、千萬圓

にする料簡さ、御覽なさい、きつと間違ひなくして見えますから、一度で二厘か三厘の口銭より取れない太物問屋が、二百萬とか三百萬とかの身代になるぢアありませんか、それに一擱萬金の株式界で、まだ確實に五百萬の金を擱んだ人のないのは職業上の恥辱ですぜ、ウンと一時に大きく取るから、また一時に大きく損をして、結局その取引が却つて大きくなれない、といふのが世間普通の理窟です、しかし細川小助だけは大きく固めて取る事を知つて居て、大きく損する事を知りませぬからね、その理窟は通らない、まッぴら御免を蒙りませう。はゝゝゝ」

をりく、大膽に面憎い事を吐しながら、手に箸を止めず、むしやくくと無遠慮に無價の物を喫ふ體いかにも、圖太い老爺なり、

かはりもの

かはりもの

「いや、細川さん、外の人は兎も角、貴君なら出来ませう、しかし、千萬圓になつた貴君ア、その千萬圓を全體、どうなさる御心算です、これも外の人でないだけに、却つて伺ひたいもんですな」

「出来ない奴に限つて、喧しく出来た時の前觸をしますが、私は遠くない近い内に必ず出来ると極つて居ますからね、さう慌てゝ前口上を述べるには及びません、はゝゝゝ、ちよいと待つて居て下さい、出来た曉、どうするか、自然に判明りますから」

「なるほどねエ、いふ事が違つてる。どうでせう細川さん、貴君から鑑一文でも貰ひたいとは思ひませんから、どうせ来るに極つて居るものなら、その千萬圓の運の端くれへ少々ばかり載せていただく事は叶ひますまいか、我々のこ

つてすもの、御面倒になるほどぢやア御坐いませんよ、世諺にも馬の尾に附く蠅は同じ千里を走るとやらでね」

「いや御馳走は御馳走だが、そりや、困ります、いけませんな、はつきりと未練氣なく、お謝絶をします、いかにも馬の尾坪に一疋の蒼蠅ぐらゐる、荷物にはなりませんかね、やはり氣になりますぜ、一升の水に一滴の油を落せば飲めない理で、金も人も雙方の組み合はせが大事です、同じ金で損する金と儲ける金があり、また同じ人で取る奴と取られる奴とありますからね、それを混合ちやア無効だ、同じ一筋の道を歩いて物を落す人間と拾ふ人間があるぢやアありませんか、第一また折角ここまで引き立てゝくれた運の神に申譯がない、目的の千萬圓を手に入れた上なら、また時と場合で御融通しないにも限りませんが、

かはりもの

かはりもの

當分まア道伴は多少に拘はらず、無愛敬の挨拶だが、嫌ですな、もし損をしま
いと思へば私の千萬圓になるまで一切、あの場所を思ひ切つて、出なさらな
方が宜い、それが何よりの安全ですぜ、出れば必ず幾何か取られますぞ」
なか／＼不意の道具外れも突かれぬ細川小助、思ひがけない山海の珍味を思ふ
存分に喫ひ、土産の折詰まで提けて電車にも乗らず、のこ／＼平氣に歩いて歸
れば、相手のハイカラいよく／＼煙に巻かれて咽せ返り呆れ返り、席料と祝儀と
料理代とに十圓紙幣三枚を置いて半泣きの遊面を作りながら遁け出しぬ、加之
も其夜は痲癩まぎれに魔窟へ飛び込んで、また十七八圓、わざわざ入らざる餘
計な苦勞して前後ざつと五十圓の損なれど、氣が腐つて律が曲つて調子が狂
て、翌日の直取引に七百五六十圓、ぐいと牛蒡抜きに持つて行かれたり、

其五

とん／＼拍子の運の神、どこに見込があつて彼奴のために働くか、古來まゝな
らね浮世の中央と稱せらるゝ不可解の株式市場を咬へて振るが如く、一舉手、
一投足、不思議や細川小助の自由自在になりぬ、千萬圓、千萬圓、次第々々に
嘘に遠く眞に近くなりて、少しも後へ戻らず退らず、實際の五百萬圓を乗り越
え、そろそろ目的の半分以上に達せし時は、石佛の胸倉を取つて捻ぢ伏せるほ
どの執念深い奴も、流石に強情我慢の手を放して、もはや彼奴は人間でない
言ひ出しぬ、

「細川さん、貴君の事を近ごろは皆、ありやア人間でないと怖れて居ますぜ、

かはりもの

かはりもの

どうか少しは人間らしくなつてをりくは、御愛敬に差支のない損もして御覽なさいよ、いくら何でも、細川さん、さう休みツこなしの立て續けに儲けるばかりぢやア面白味がありますまい、こゝは昔から損もしたり益もしたりする勝負場所ですよ」

いかに四方より火を付けても燃えぬ奴、また水を掛けても浴せても濡れぬ奴、相變らず片田舎の土百姓然たる容貌風采、笑ひもせず怒りもせず、毎日々々、同じ晝飯代用の麥蕎二杯を掻き込んで、吐す事いよく大膽不敵に人を人臭いとも思はぬ奴なり。

「さア、どんな味のするもんか、私も、をりくはをして見たいと思つて居りますがね、こりやア前世の因果ですな、いくら振り放しても振ぎ放しても無効

かはりもの

だ、金と運が一所懸命この私に獅噛み付いて、いやはや、辛い事、うるさい事悪女の深情に取纏はれた心持は、かういふもんでせうなア、あゝまた今日も二萬ばかり轉がり込んで来やがった、畜生、どうして叩き出さう、皆さんが絶えず年が年中の御經驗だ、この腐れ縁を何とか切る方法はありませんまいか」

ありませんぜ、細川さん、逆も貴君の金と運に向ツちやア、男の我々が五人や十人ぐらゐの經驗で追ッ付きませんよ、まづ女ですな、女に限る、いくら貴君だつて素敵な美人を見りやア、まんざら悪い氣持もしますまい」

「はゝゝゝ實はね、近來めツかちの驕アにも飽きて來ましたよ、どツか年の若い美しい女がありやア世話して下さい」

「木の股から生れた細川さんが戀煩ひでもするやうな、すばらしい女を見付け

かはりもの

出して、どうなるか一番、取組ませたいもんですなア」

「いや、さういふ思召があれば、早手廻しに戀煩ひをして置きませうか」

「するッて、細川さん、相手なしに戀煩ひが出来ますかね」

「なアに相手は誰彼なしだ、皆さんは平生も、さういふ二の足を踏んでかゝる料簡だから金も運も取り外すんだ、女にしる戀にしる私の流義は、先方の來るのを待たずに、此方から煩ひ當てゝやるんですよ、はゝゝゝ」

金と運の勝負では逆も叶はぬ奴、せめて當座の腹癒せに毒口でも叩いて、馬鹿にしてやらうと思へど、始めは注文通りの馬鹿になりながら、いつの間にか相手を馬鹿にする細川小助、どの點から考へても向うても、一筋繩では行かぬ老爺、まづ株式界に彼奴の蠢く間は、いづれも御用心、御用心枕を高くして寝ら

れぬぞと私語さぬ。

其六

いまくしいが儲、誰が飛び出して喰ひ止めるといふ相手も出ず、出れば出る相手を鬼一口の餌食として、丸呑み鵜呑みに胃の腑も損せず、ますます肥え太り、みるくうちには百萬圓の大金、こそりと十六箇所の銀行へ預けたとの評判、もはや十分の八まで目的を漕ぎ付けて、いよゝゝ千萬圓は嘘でなし、

あの八百萬圓のため、どれほどの人間が生死の間に空き落されしか、ピストル自殺が一人、鐵道往生が二人、首縊りが三人、行方しれずの夜逃が十餘人、泣面を蜂に刺された連中は殆ど數しれず、まだ後の二百萬圓で幾何の人を惱める

かはりもの

かはりもの

かと、わい／＼騒げど本人は濟し込んで頗る平氣の顔色、横綱力士が殺されもせず一人土俵で威張れる間は、まづ私も無事ぢやと笑ひぬ、
 されば彼奴あのまゝ無事に居られては、我々の安心する時がないと死物狂ひの糞自棄に張つて向うた七人組の男、志は天晴れ勇ましかりしが事實の結果、あはれ枕を並べての討死、これがだめ細川小助、また七八萬圓を拾うたやうに擱んで、ます／＼千萬圓に近くなれり、もはや彼奴あの運に乗じて、あゝまでなつた以上、口惜いが、殊念ながら指を咬へて見物するより外なしいッそ、一時も早く目的の千萬圓にしてやッて、怨敵退散の御祈禱が寧ろ却ッて我々のためぢやと、俄に弱い音を吐き出しぬ。

其七

細川小助、九百萬圓に手が届いた時、めッかちの女房が重いインフルエンザより急激の肺炎となり、可愛想に病院へも這入らず十五圓の伊家住居に薄穢い木綿の敷蒲團で一月あまりの後、名もない筭醫者の手にかゝりて、ころりと死せしが、その葬儀の費用一切で三十七圓、

當時の株式界で肩を並べるものゝない全盛に、取引の仲買店以外、誰一人の見送るものなく、近所合壁を合して、わづかに二十人足らずの行列、されど流石に細川小助の眼中、涙に濕つて居たぞと不思議がりぬ、
 同じ事で彼奴が死ねば面白いに、他人の運は固より現在つれ添ふ鼻アの、運命まで奪び取る奴、どこまで際限なく押し上げるかと、たゞ呆れて驚いて冗談の一口も出すものなく、意氣地のない端た野郎は福の神でも歩いたやうに内々そツと

かはりもの

かはりもの

其足跡を踏んで通るほどなりしが、どうした拍子の瓢箪に龜裂が入って漏れ出したか、さしも人間業でないといはれた細川小助の九百萬圓、鼻アの死んで以來そろく、缺け始めぬ、

鬼でも蛇でも平氣に取って食ふ細川小助、聊か眉を擧めて小首を傾け腕を組んで思案を仕出すや否、もう尋常の老爺が割り出す智慧と工夫なり、自然の福を運び込む運の神は俄に立退いて、恐しや急轉直下の玉を轉がすが如く、今一息で千萬圓の頂上より眞ッ逆様の降り坂、足の止め度もなく手の掛りもなくするくべツたりと物凄く迂り落ちぬ。

其八

五六年以來、逆も難攻不落の城廓と諦めて、空しく手を束ねし四方八方の敵は、

かくと見て一時に躍り上り飛び上り跳ね上り、親兄弟の仇敵でも討ち取るが如き勢ひ、二度と再び生き還らぬやう致命傷を刺せと、押し伏せ捻ぢ伏せ折り重なりて細川小助の生首を搔ツ切りぬ、加之も凱旋の祝賀會を催して天長節よりも盛なる宴を張りぬ、都下の新聞紙上これを傳へて曰く、既に死せりと雖も細川小助また一種の豪傑なりと、

九百萬は儲置き、二三十萬圓でさへ、別荘もあり妾宅もあり書畫骨董も買ひ入れる株式界の成金黨に、九百萬圓そのまゝの正金を手を付けず、こツそりと銀行へ預けて置いたは、いかにも用心堅固のやうなれど、今となれば結句の不幸、すぐ手早く間に合せて自由に遣へただけ猶更一文も残らず、人に頼まれし貸もなければ、まして取る證書一通もなく、せめて三月か半歳の籠城を支へる時計

かはりもの

かはりもの

も指輪も煙草入もなく、本所の龜澤町も十五圓の借屋住居、その借屋にも住み兼ねて、嗚アは死んだ獨身の淋しさ、やうく臺所の世帯道具を叩き賣つて押上の奥に成り下つた三圓五十錢の棟割長屋、よく盛者必衰の理を身に沁みたものか、折も折、時も時、本人また病氣に取り付かれぬ、いかに運の神が思ひ切つて見放したにせよ、これは案外あまりに思ひ切つた無残な見放しやうなり、

遂に過ぎた潜上の奢侈は固より危けれど、また世間に構はず只これ金ばかり積んでも却つて危いもの、なるほど人は自分の境遇を相當に持てば、まさかの時ああ急に脆くも亡びまいと、細川小助の落目を手本に始めて悟つた奴あり、

其九

する事、なす事、思ふ事、いちく外れず的に中つて、心配もせず苦勞もせず躓きもせず、首尾よく容易く九百萬圓まで出来た心には、千萬圓を何の仔細も絲瓜もなく、今一息と覗うた細川小助さらに無理はなけれど、その九百萬圓が細川小助の運命を張り切つた絶頂なりしか、五十に近き今更ら元の奎阿彌となり果て、押上の奥に病を抱きながら、その日の米も乏しく味噌醬油の通ひ路も絶え、呼んだ醫者も來ず介抱するものもなく、株式界第一の全盛期に女房を失うた時でさへ、その葬式は二十人足らずの行列よりなかりし男、かうなつた今日、わざわざ誰が見舞に來るものか、その門口より不意の聲、

「御免なさい、御免なさい、細川さんは此方ですかね」

他人に金も貸さぬ代り借りた事もなく、まさか借金取でもあるまいと、これだ

かはりもの

かはりもの

けは安心しながら、瘦せ衰へた髻蓬々の病ひ面を煎餅布團より持ち上げて、さも苦しげに力ない落ち窩みし眼を額越

『どなたです、誰です』

「やア細川さん、僕だよ」

ぬツと這入りて、すツと上り込み、枕頭に坐せしは、この細川小助が人を人も思はぬ全盛中に、聊か手應のある奴と見た相手、その名は吉田作平

「細川さん、どうですな、病氣の工合は」

「いけない、いけない、もう無効だ、私も運の窮極だ、覺悟はして居ます、五萬や十萬の端た金から面倒臭い二千や三千の眼腐れ金が残ったと違ッて、九百萬圓の素天邊から逆落しの無一文になりやア澤山だ、取ッた金を取られたのは

少しも惜しくないが、折角かうして死覺悟の最中、愁ッか吉田さん、貴君に見舞はれたのは残念だ、同じ落ちて飢死するくらゐなら、誰にも顔を見せずにこのまま死にたかつたよ」

「豪い、流石に細川さんだ、かうなッて少しの未練も愚癡もないところは立派だ、しかし細川さん、僕も實はね、わざと君の病氣を深切に見舞に來たンぢやアありませんぜ、あれほど世間普通の人間と出來工合の違ッた君の落目と死際は、どんなものか、すまないが後學のため見物に來たのさ」

「おも、おもしろい、はゝゝ面白、見物に來たは面白いね、吉田さん、どう見えます、ものゝ悲哀を感じますか、但し胸の溜飲が、ぐツと一時に下ッて小氣味よくなりますか」

かはりもの

かはりもの

「病氣の見舞でなく、見物に來た事は、來ましたがね、さて細川さん人は弱いもんだよ、この門口へ來るまでは見物の心算で、今この枕頭へ坐つて現在この薄ら淋しい様子と、その青褪めた顔を見ると、やはり急に心が變つて病氣を見舞ひたくなつた、いはゞ遺恨こそあれ恩も義理もなく、最初から最終まで残酷に窘め抜かれた僕で、ちよいと名を聞いても胸が悪くなるほど癢に觸る君だつたが、そりやアお互に勝負を争つた敵と敵との時だ、今日かうなつて見りやア、過ぎた君の全盛ばかりが眼に残つて、猶更ら妙な氣になりますよ、どうか細川さん、この吉田に病氣を見舞はして貰ひたい、さう何も死際まで頑固に威張り通さなくつても宜からう、どうです、おとなしく病人らしく僕の見舞を受けて下さらないか」

「いや、さういはれて見ると、私も人間だ、弱くなりますよ、ありがたい、この門口までは見物に來ても、この枕頭へ坐つて見舞うて下さるのは吉田さん、實に貴君一人だ」

吉田作平、懐中の紙入より小切手一枚を取り出し、病める枕頭に差出しぬ、

「門口までは見物の心算で來た僕だから用意をして來ませんよ、幸ひ失禮だが細川さん、餘所へ渡す筈の小切手、これを受けて下さい、無論外に人手がないやうだから僕が歸途に現金と引替へて届けませう、元の君から見りやア塵ツ端にも足りないが、浮世と時節で今この境涯ちやア醫者も藥も來るだらう、さう飢死を急がずに出來るだけの養生はして下さい、細川さん、いッそ病院へ這入つた方が宜いちやアありませんか」

かはりもの

かはりもの

細川小助、骨ばかりの両手に、その小切手を押戴きながら、見れば七百圓、むくりと俄に起き直ッて、ドンよりと病める兩眼は急に光輝を放ちぬ」

「吉田さん、私は十圓か二十圓と思ッて居ましたよ、これだけあれば醫者も薬も入らない、一番これで直取引を賣ッて見て下さい」

翌日の米代もなく、この重い病氣に取り付かれて醫者も薬もない介抱人もない細川小助、何は儲置き、病院へ行くかと思ひの外、七百圓そのまま、抛け出して死際の一勝負を試みむとは、吉田作平、あツと呆れ返りて物も得いはず。暫時無言に其顔を打守りぬ、

其十

達者で勢威よく九百萬圓を擱んだ時よりも、病み果てた死際の七百圓を醫者も

迎へず薬も飲まず直取引を賣り叩いた細川小助は、その所爲の奈何は別論として迎へて凡人の出来ぬ業、一旦、見放して立退いた運の神もあまりの大膽不敵に驚いて怖くなつたものか、自然に呼び戻されて三日の間に三千圓ほど運び込みしが、壽命の神だけ頑として應ぜず横に首を振りしがため、あはれや四日目に往生寂滅、死骸の下より吉田作平に宛てた一封の遺書、それを開けば新に儲けた二千圓の事は一切いはず、たゞ「御禮」の二字を残しぬ。

別に何の遺言もなければ、吉田作平その二千圓の内、千五百圓を養育院と孤兒院とに寄附し、残る五百圓を以て佛事を營み石碑を建てぬ、

吉田作平、いつも人に對うて口癖のやうに語るを聞けば、なるほど九百萬圓までは義理も人情もなかつたが、どうするか、あの男に目的の千萬圓を持たして

かはりもの

かはりもの

やりたかつたと、この一言、たしかに死んだ細川小助のため千僧の供食にも優れり。

豪傑

其一

秋風埋骨故郷山と英雄の末路うたゝ哀れの一句に魂魄ふらくと誘はれ、數ならぬ我も諸共に小腕たゝいて城山の煙と願ひしが、その頃やうく取つて十三歳、いまだ隼人の兵兒組ならねど、あたら稚子を殺すな可憐の少年助けよとて、惜しからぬ生命、無念や人々に押留められ、さても今日まで甲斐なき世に連れて、薩摩の住人竹迫七熊の名こそ満足に保てど何一つの思ひ出もなく、わづかに残る兵車の荒田に鋤蹴とつて今や早や二十八歳とぞなりぬ
竹馬の某は學成り業遂けて歐米にありと聞けど、我より二つも年長の身を持ち

かはりもの

かはりもの

ながら、一發の砲聲に兩耳掩ひし腐れ根性の未をかしやと冷笑ひ、隣家の誰は官途に上つて位階を賜はり、坂の上の婆様が子は民間の利者とて有志の頭領と傳ふれど、彼奴等が飛んで跳ねたる最後を見たと、胸を叩いて罵る竹迫七熊なんとかしけん、腸なき都門の景色みて笑うてやらんとや、ただしまだ日蔭の鬼あざみ、たま〜出でて花に邪魔せんとや、今年の軒端や、涼しき初秋のころ、故郷を後に、いざや東京といふ土地へぶら〜と罷り上りぬ、もとより馬車の便を假らず、わづかに海わたる時のみ舟に乗りて、地の續かん限りは赤脛ぬツと旅路の風に手作りの布草鞋一足、外に用意の一足は晝の辨當もろとも腰にしツかと付けて脇目も觸らず、されど道すがら千里一瞬の汽車を見送つて、この豪傑グル〜と兩眼をまはしぬ、

今更いふに足らねど、井の蛙びよこりと大海に飛び込んで我面に水の強情も押し切れず、竹迫七熊、兩肩いからして己れやれと足踏み占むれど日本一の大都會、まご〜すれば、馬車風に吹き飛ばされんばかり、昨日の豪傑今日は木の葉一枚の姿あやふけれど、うまれついた剛愎に我れ獨り分厘も動ぜず、芝口の安宿に拵定めて白晝は目的もなき旅鳥、足に任せて東西南北と飛び廻りつゝ、此所は何處と尋ねもせず今九段坂を上らんとしながら、亡者の如き瘦男一人腕車に乗せて汗たら〜に曳き行く後ろより一目見て鼻と肩とに五分の笑を含み、これは又なんたる事ぞ、拙者が指頭に一押し押しして助けくれんと、物をもいはず片腕ぬツと差出し、それ曳けやツと押し上ぐれば、車夫は驚きながら謝禮の一言。乗主も深切なる人と思はず振り返り、

かはりもの

かはりもの

「やッ、竹迫どんぢや、ごはハンか」

いはれて七熊何奴と見上ぐれば、四年以前わが諫言も用ひず故郷を出でたる不
所存者、大山時彦なり、

「よッ、彦どんか」

何というても仇敵に出逢ひし心地もせねば、七熊の頬邊に笑み浮びね、

「その後」

「元氣で善ざんさ、いけんして御來した、久しう逢ひもハンな」

坂の中途に立ちながら、互に改めて顔見合はし、挨拶そこ物語り別後を物語り
ぐ、うちつれて何處ともなく立去りぬ。

其二

山出しも尋常一様の山出しながら、薩摩の果の草叢に多年頭を突ッ込んで浮世
の風心地そよとも肌に染まぬ竹迫七熊、四通八達の街衢に耳目の應接いそかし
く、一月あまりは夢みる如くほッと過せしが、そのうち一夜大山の下宿なる本
郷弓町に泊りし時、白晝の勞れにスヤ／＼眠ると思ひの外、東京は善い土地で
ごはんさなア』と思はず出でし寢言を、あはれや枕並べし時彦に聞かれ、さて
は此奴、口にこそいはね眞實心は赤好みなるに、わざとシラ／＼しう白は本色
と吐せしのみか、時勢に後れじと國を出でたる我に向ひ、魂魄の抜殻とは何た
る言様ぞ、おのれ不届もの、よし、その化の皮ひん剥いてくれるか、たゞしそ
の腰骨を膠もて東京の土臺に押付けくれんか、二つに二つは必定わが手のうち、
近ごろ面白し今に見よ、南州先生の忌日まで忘れさせんものと、大山時彦ひよ

かわりもの

かわりもの

ンな所に力瘤ちからこぶいれて、あはれやこの豪傑かうけつを取挫とりひしかんとす。
 四箇年かねんいざん以前、先發せんはつの大山おほやまが、意を竭つくして言葉巧ことばたくみに吹き込んだる魔風まかぜ、いづこの毛穴けあなよりや用心深ようじんぶかき七熊くまの身に染しみ互たりけん、實じつは懷中かこころも秋風あきかぜたちて淋さびしきまゝの人ひとなつかしさ、いはるゝまゝに同郷どうきやうの情誼じやうぎと片かたよろこびの心地こころもろともいつしかズル〜と大山おほやまが下宿げしゆくへ引き込まれぬ、南無三なんむさん、蛇へびに規はらはれたる小田せだの蛙かまづ、兩肱りやううひ張はつて目を見開みひらき。バクリ〜と唇くちびるをたゞけども所詮しよせん叶かなはず。

其三

この十一月二日の酉とりの市いちといふは、そもや西南戦争せいなんせんそうに劣おとらぬ必死めつしの揉もみ合あひ、脛力すねぢからたらずば踵かかとを浮うかされ、腕力うでぢからなくば身を宙ちゆうに上げられんと聞きくや否いな、竹迫たけせき

七熊大の眼まなこを怒いからして反身そりみとなり。

「こん東京とうきやうの奴やつどんが押合おしあひを、先生せんせいの騒動さうどうに比くらぶるとア、御ごまんさア全體ぜんたいど

この人ひとな、今いま一度いっどいッておみやハン、すさろう、ましこさくな」

「いんにや、虚偽うつそぢや、ごはハン」

大山おほやまが突き出す盾たてに七熊矢くまやの如ごとき猛勢まうせいたまらばこそ、いざ其そのの證據しやうこみせよ、根生ねおひの薩摩隼人さつまはやが打ち通とおる向むかふに人里ひじんといふものなし、悲かなしや大山奴おほやまめ、わづか四年ねんの間に骨ほねも抜ぬけたるか、長大息たのいきもろとも其日そのひの夕方ゆふがたより伴ともなうて本郷ほんきやうの下宿げしゆくを出いでぬ。

昔むかしより今いまに至いたるまで江戸えどの年中行事ねんぢゆうぎやうじのうち、随ず一の人ひとの山やまに數かずへ築きづきしは酉とりの市いちさすがの、竹迫たけせきも心に驚おどろきながら言葉ことばに恥はぢて色いろにも見みせず、先まに立つ大山おほやま

かはりもの

かはりもの

を抱き退けて己れ先驅となり、踵返し肱鐵砲あるは胸空き腰跳ね、薩摩猛雄の
 覺えの藝をこゝに演じて群集を割り行くに、さらぬも氣早き水育ちの江戸ツ子
 いかで堪忍すべき、ましてや今日は氣負の祝ひ日、この芋尻野郎と突き返す腕
 首を七熊ぐシと取つつ動かせず、

「汝ア何者かッ」

いひざま忽ち組んで人浪をうたせ、わづか二時間あまりに六箇所の喧嘩口論を
 始めしかば、こりや堪らぬと大山あわてゝ引き摺りながら、やうく逃げ出せ
 しを、いづこと思へば、生命と金銀の大坩堝、さアく御坐れと手招き怖ろし
 き吉原の花街なり。

さア喧嘩したくば飽くまで此里でせよ、天下の豪勇を海鼠に揉み取る曲者この

うちにありと、大山しきりに七熊の手を引きつゝ小格子の前に立てば、竹迫お
 もはず振り返つて拳を固め、うぬ大山、われを誰とか思ふ許さぬ、武者拂りつ
 くを、えッこの外見英雄奴これ喰へと腰を押せば、ヨロくとして仆れこむ後
 ろより聲かけて、

「そん客、逆すな」

大山の一言に何かは躊躇せん、書生の門喧嘩は見てくれの野暴體哉、それ心得
 たりと若い者飛んで出で、入らッしやいの聲もろとも、内外一時の敵となつて
 竹迫七熊、あれはや遂に生擒られたり、

わが姿みせては彼奴なかくに荒れなんと、大山わざと顔を隠して相方の女に
 賄賂を送り、さてかうくと頼み込めば、笑ひながら首肯く胸に七熊の生命あ

かはりもの

やふし。

かはりもの

大山時彦、その翌朝に目早く起き出でて、彼奴なんとかしけん、その面に唾吐きかけて笑ひくれんと、七熊が部屋の方に行き見れば、六枚屏風の物影に残んの燈火消えもやらず、耳傾ければ睦まじけに私語く聲しけり、はて不思議と拔足ながら差覗けば、夢さめて竝べし枕の間に白紙一枚の隙もなき有様、やッ此奴いよいよ妙なりと、立ちながら聲をかけ、

「おいッ七熊どん、起きやハンか、七熊どん、七熊どん」

いはれてスバリと夜具の中に頭を埋めぬ、女は寢足らぬ目を細くあけて額越しに大山を見やり、片手に夜具の袖を思ふばかり押し上げて、

「もし、お起きなさいよ、お朋友が来て入らッしやいますに、もし〜」

「おい〜、起きんか」

竹迫七熊、やう〜首を出して聲をふるはせ、

「大山どん。起きること出来もハンない」

「馬鹿ンことを、何事な男兒か」

「インにや、こん女が、おいどんの足を強か抑へて動かシヤしもハンない」
きくより大山たまらばこそ、そのまゝ七熊の頭にしがみついて、

「いま一度いッておみやはい、許しもハンぞ」

傳へ聞く、この豪傑うてども叩けども國へ歸らず、この女また憂身やつして我から戀にあくがれしが、それといふも僅か半月、三の酉の夜、手に手を取ッて

かはりもの

かはりもの

落人きめしとぞ、下思議々々々と聞くまゝに斯の如し

俠骨三人男

血河屍山の痕跡は白髪老翁が自慢の額疵と共に一場の座談となりて、今は櫻咲く花の下に衣香扇影の華奢を見る正保年間、興亡成敗の文句は片田舎の腐れ儒者に譲りて徳川の流れ清く三並葵の金紋かゞやく大江戸の中央を、

婚に取りたや三國一の、嫁となる身は誰である、さつても美事な伊達振子あゝ何とせう、あの君様を

こて、そのころ小唄の一節に唄はるゝ古今無雙の男あり、姓は高島、名は左近といふ、

高島左近は九歳の幼小より三代將軍家光の左右に侍りて、花も香も露に照り添

かはりもの

かはりもの

ふ月の風情の桂男と呼ばれつゝ近臣中に隨一の名を得たる小姓なり、しかも當家武功の高島禪正が最愛の一子に生れ、そのころ大奥の女流一切を司どりし壽林比丘尼を父方の祖母に持ち、几帳の蔭より天下の政權を操りし春日局に次いでのお老女、讃岐局を母方の祖母に持ち、身は將軍の寵臣として當年こゝに十九歳、その姿の玉を欺き花に競うて描ける如き美男のみかは、天生の膽魂は手足の爪先までと隙間なく満ち渡りつゝ、六尺不群の毛脛男を蹂躪つて物も言はせまじき活氣大膽、君前伺候の時は登城の大名小名いづれも見惚るゝばかりの色若衆なれど、出づる時は緑の黒髪を大髻に引き絞りて水際だつたる凛々しさ、遠山霞と名づけたる舞馬に本田の白鬢を食ませて磯千鳥の磨出鞍に打ち跨がりつゝ、琴の絲もて巻き立てたる三尺無双の太刀を横たへ、伊達小袖の襟うち寛

けて刑部梨子地の大印籠を輝かし、薄色革の半足袋に奉書糾緒の厚草履、馬前には仁王の如き手振奴の荒若黨六人を徒足のまゝに打ち立たせ、馬後には芝の鍊えたる槍の穂に定紋散らしの塗鞘かけて、四邊に薫する伽羅の匂ひにも似ず、その千段巻の金札に墨くろくくと書き附けたる十四文字

一心無敵、高島左近源國宗、十九歳

されば高島左近が登城下城の道すがら、町人小者の比類は固より時の諸侯も何とやら憚りて足早に辻を廻りながら、さて見返り見送れば天晴れ當時に比類なき寛活華奢の絶頂、男振は古今無雙の伊達若衆なれど、天生の豪氣は先來の不敵もの、生命しらすの猪武者ぞ、しかも將軍家の出頭隨一として大奥にも深き根ざしの縁ある男、いはゞ鬼神が花の姿に化けたる曲者ぞや、うろくゝ狼狽へ

かはりもの

て身代破滅の喧嘩を買はるゝ、なかりにも會釋して不意の崇りに逢ふな、とは
 いふものゝ男一代、あれ、あの姿を見よ、花が左近か左近が花か、伊達の振子
 を婚に取りたや三國一のと唄へば、満都の女姓いづれも人知れぬ夢に忍んで片
 思ひの戀に憂き身を妻しつゝ、あゝ何とせう、あの君様を、嫁になる身は誰で
 あるとぞ唄ひぬ、

さるを其頃おなじ旗下八萬騎のうち一人、赤井源左衛門が次男に彌兵衛とい
 へるものあり、當今こゝに二十七歳、六尺の屏風もて身を圍はれながら、ずつ
 と軽く飛び出でて音もなく座に立ち、片手を軒の端にかけて、そのまゝ身ハ宙
 に翻しつゝ屋上に立つ風情、さながら燕の飛ぶに似たりとて、燕の彌兵衛と呼
 ばるゝ名物男、しかも二十七の今日まで、敵といふものを許せしことなき水あ

ぶれの一徹に、おもはず鼻頭の小皺を寄せて冷かに笑ひつゝ、高島左近め、何
 の白癡の伊達振子ぞ、よし、さらば、時機あれかし、彼奴が伊達の振り鹽梅と
 燕の彌兵衛が飛び鹽梅、いづれが面白いやら、出逢はゞ最後、もつて開いて晴
 の一勝負してくれむとぞ叫びぬ、

ころしも水無月の照り續いたる乾蒸に堪へ難ければ、幸ひ今日の炎暑を兩國の
 川船に忘れむとて、平牛の懇意に誘ひ合せし友朋輩三人と共に番町の屋敷を立
 ち出でし赤井彌兵衛、元來うまれて嚴寒の素肌を厭はねども夏は人一倍に禁物
 の汗男、櫻田門を打ち過ぎし頃は、はや胸邊に扇子の風の手いそがはしきを見
 て、一人の朋輩うち笑ひつゝ、この炎天には流石の燕も得飛ぶまいぞといふを、

かはりもの

彌兵衛しづかに振り返って、いや飛ぶ段は儲置いて、生命も危いと高く笑ひながら、ふと前途を見渡せば七八人の手振奴を先に立せし馬上の寛活姿、や、あれこそ、小唄に唄ふ伊達振子の高島左近と聞くや否、燕の彌兵衛おもはず歩を停めて身を斜めに編笠を傾けながら、怒れる猛牛の物を覗うて吼ゆるが如く、さては彼奴か、ござんなれ八幡梵天、むうくと呻り出しぬ。

高島左近は前夜殿中の宿直を果して、今しも家に歸らむとする下城の體、おのがまゝの物見遊山ならねば流石に憚りてや、今日は傳へ聞くほどの華奢ならねど、元來の伊達男、大霞の麻上下に二つ引の葛の帷子、例の手振奴に先を拂はせて馬上しづかに九本骨の古代扇を使ひつゝ、蹄の音も寛やかに歩みくる風情、背後に聳ゆる城の櫓の景色に添うて一幅の畫を見るが如し、

俄に笠を傾け歩を止めて何をか呻り出せし赤井彌兵衛が體に、朋輩そつと其の袖を曳いて小聲になりつゝ、

「これは何とした燕どの、くねらぬものは戀の水上、青柳の絲の一條二條さらりと風にまかせて清き流れの底に映れる風情、歌舞伎若衆も及ばぬとは眞度、燕と異名の足下に猶更、こゝらで、飛び付く御工夫あるまいか、はゝゝゝゝ」
いふ袖さつと打ち拂うて肩を怒らしつゝ、彌兵衛おもはず二歩三歩すゝみいでぬ、

「その青柳の枝も葉もあるものか、ひつ擱んで根元から横に捻ち切る力鹽梅、そこ退いて見物さつしやい」

言葉もろとも雙裾ひつからけて力足を踏み出せば、南無三寶また例の狂暴が起

かはりもの